

## 【論文】

## 立命館大学・学園祭史

—画期となった一九七八年—

松本 力也 二〇二〇年度卒業論文（立命館大学文学部日本史学専攻）  
 山崎 有恒 加筆修正（立命館大学文学部教授）

## 【凡例】

- ・史料の引用にあたって、旧漢字は適宜新漢字に改めた。
- ・引用史料中の（中略）等の表記はすべて筆者の付記による。
- ・本文中の年代や数字の表記は漢数字で表していくが、史料名や史料中の数字には変更を加えない。
- ・読解不能の文字は■で表記しており、筆者によるものである。

## はじめに

本稿は立命館大学学園祭の歴史を取り上げ、それをいくつかの画期に分けるとともに、その転換点がどのようなメカニズムにより発生したのかを分析したものである。

学園祭の歴史は戦前に遡り、東京大学で五月祭が初めて開催されたのは一九二三年のことであった<sup>(一)</sup>。かつての学園祭は、大学の創立日に行われる記念行事や、学生による研究成果発表、そして学生たちの交流の場として開催されており<sup>(二)</sup>、運動会や園遊会、芸術祭、弁論大会などが行われていた。しかし時代と共に企画内容や企画形態が変化し、現在ではメインステージで行われる様々なパフォーマンス、そして立ち並ぶ模擬店、プロタレントによるイベントといった特徴を持つ祭典となっている。

しかしながら大学史研究そのものの厚みと比べ、学園祭史に対する研究成果は驚くほど少ない。大学史研究は、その背景となる制度的変遷や、戦後日本における大学改革、一九九〇年代の大学改革などを対象に豊富な成果を生み出してきた。例えば、大学制度の変化を社会情勢や政治情勢を踏まえて考察した天野氏の研究や<sup>(三)</sup>、一九九〇年代の大学改革によって浮き彫りになった課題を考察し、大学教育に求められているものについて論じた寺崎氏の研究<sup>(四)</sup>などがその代表的なものである。また、戦後の若者文化を通年的に分析した若間氏の研究や<sup>(五)</sup>、戦後大学生の特徴を時代区分して分析した溝上氏の研究<sup>(六)</sup>なども重要な成果と考えられる。

ところが大学の学園祭を対象にした研究となると質量ともに非常に少ない。ある単体の学園祭にスポットを当て、そこから時代像へと話を展開する研究<sup>(七)</sup>や、一つの大学の学園祭を通時的に扱ってはいるものの、それぞれの時代の学園祭のテーマをまとめただけのもの<sup>(八)</sup>が大部分であり、当時の史料を用いて学園祭の変遷・変化について詳しく考察を加えた研究は管見の限りない。

それでは本稿が主題とする立命館大学学園祭についてはどうだろうか。近年編纂された『立命館百年史』

において、学園祭について論じた個所は極めて断片的であって<sup>(二〇)</sup>、学園祭の変化について体系的にまとめた研究はほとんど行われていないと言ってよい。そしてこうした研究状況は決して立命館大学学園史のみの話ではなく、近年刊行された大学史・学園史にほぼ共通する傾向であると指摘できる。しかしながらどの大学においてもほぼ毎年開催された学園祭は、その時代の学生の気質や気風が良く表れている格好の素材であり、これを捨象・等閑視してきたこれまでの大学史・学園史の編纂の在り方には、大変大きな問題があったと言わざるを得ないように思われる。

そこで本稿では、立命館大学学園祭を取り上げ、当時の学生がどのような思いを抱き、どのような学園祭を創っていったかを正面に据えて分析を加えたい。

立命館史資料センター（立命館百年史編纂室の後継となるセクション）に残されている、学園祭開催当時の史資料類や学園祭パンフレットをベースとし、そこにそれぞれの時代に学園祭に参加していた方への聞き取りなどを加えて、各年度の学園祭の企画内容を検討し、そこに大きな画期を見出していきたい。

さて最初に大きな見取り図を提示しておきたい。一九五〇年代から一九六〇年代後半までの立命館大学学園祭は、学園創立記念行事としての性格が強く、サークルによる企画内容は、社会情勢を反映させたものが多かった。しかし一九七〇年代に入ると、クラスやゼミを中心とした企画が多く登場し、ある分野のスペシャリストによる社会分析・社会批評から、お祭りの要素が強い企画へと変化していった。そして一九七八年からは日程を短期間にして企画を集約、その結果現在のようなお祭りの要素の強い総合祭典としての学園祭へと変化していった。筆者はこの一九七八年前後に大きな画期があったのではないかと考えている。

そこで、一九七八年の前後に分け、それぞれの時代で学園祭の在り方がどのように変化していったのかを明らかにしたい。

以下第一章では、一九五〇年代から七〇年代にかけて立命館大学で行われた学園祭がどのように行われていたのかを詳細に見ていき、そこから見えてくる特徴について検討していく。続く第二章では、総合祭典としての性格が強まった一九七八年以降の企画内容を検討し、それを第一章と対比することで、一九七八年以前とそれ以降ではどのような転換が生じていたのかを導きだしていきたい。

本研究では、立命館大学新聞社が発行していた『立命館学園新聞』と『立命館大学新聞』を中心的な史料とした<sup>(一)</sup>。また、学園祭が開催される際に発行されていた学園祭パンフレットや、当時の学園祭を知っている方への聞き取り内容なども史料として用いていく。本論文では、一九六九年に立命館大学に入学して、一九七一年に学園祭実行委員会に所属していたS氏<sup>(二)</sup>と、一九八〇年に立命館大学に入学し、当時の学園祭にも参加していたというO氏<sup>(三)</sup>、そして一九七六年に立命館大学に入学して、一九七七年から一九七九年まで学園祭の運営に携わっていたN氏<sup>(四)</sup>、一九八四年に入学して一九八七年の学園祭の実行委員長を務めたK氏<sup>(五)</sup>の合計四名の方に聞き取りを行った。

## 第一章 学園祭の始まりと画期の前兆

### 第一節 黎明期の学園祭

立命館大学で初めて学園祭が開催されたのは一九四八年のこととされているが<sup>(二六)</sup>、『立命館百年史』<sup>(二七)</sup>では、一九五〇年に立命館学園創立五〇周年記念の一環行事として記念学園祭が開催されたと書かれており<sup>(二七)</sup>、それが『立命館百年史』における学園祭についての初めての記述である。すでにこの段階で『立命館百年史』には事実誤認が生じているように思われる。

一九五〇年の学園祭の内容は、講演会を中心として様々な企画が実施されており【図表一】、立命館学園創立五〇周年を祝う行事である記念学園祭として開催されていた。その後学園祭は学園創立記念学園祭という形式で毎年開催されるようになっていったのである。一九五二年の学園祭においては外部から講師を招いての講演会や、チャタレー事件・松川事件をテーマとした模擬裁判が実施されるなど、企画の幅が広がっている<sup>(二八)</sup>。さらに、一九五三年から一九五五年にかけての学園祭では新たにスローガンを掲げて開催されるようになっていた【図表二】。その頃の学園祭では、今までよりもさらに大学全体を巻き込んだ全学的な催し物にしようと、プログラム内容を充実させたり【図表三】、スローガンを決めて組織を改めたりするといった様々な取り組みが行われ<sup>(二九)</sup>、実行委員会が一般学生たちに向けて学園祭に積極的に参加するよう呼び掛けられていた<sup>(三〇)</sup>。しかし、学園祭に企画している側の学生と参加する側の一般学生との意識の差が浮き彫りになり、学園祭期間中にも関わらず実家に帰省する学生が多かった<sup>(三一)</sup>。

一九五〇年代後半に入っても毎年恒例の記念行事として学園祭が開催されていた。当時の日本では、第二次世界大戦で大きな打撃を受けた日本経済が徐々に復興軌道に乗り、一九五〇年代初めには戦前の水準への復帰を果たし、一九五〇年代半ばから高度経済成長が始まっていた<sup>(三三)</sup>。そして所得倍増計画に始まる一九六〇年代は、経済成長への期待が高まっていく時代だった<sup>(三四)</sup>。この時期の学園祭では、「学術大会」「芸大会」「体育大会」「理工大会」という企画が組み込まれ【図表四】、各分野間の連携や内容の充実が図られた他、実行委員会が学園祭のパンフレットのようなものも作成するようになった。

その後の学園祭では、一部の学生だけではなく、より多くの人に楽しんでもらうために、新聞やパンフレットを活用しながら、市民だけではなく、学園祭に実際に参加するサークルや団体に対しても有意義な学園祭になるように呼びかけた<sup>(三五)</sup>。さらに新企画である前夜祭を計画したりするなど、新たな取り組みがなされた<sup>(三六)</sup>。企画の中身では今までのような映画祭や演劇の他に、当時の社会情勢を色濃く反映した講演会や討論会、時事問題を取り上げてテーマの選択をしているサークルなどの企画が行われる傾向が強くなっていった<sup>(三七)</sup>【図表五】【図表六】。その背景には学園祭という場で日頃の活動の成果を発表することで、社会に対してメッセージを発信するという意図があった<sup>(三八)</sup>。しかし、実行委員会の取り組みの遅さとサークル自体の勉強不足が原因で内容が乏しいものになるといった課題もあった<sup>(三九)</sup>。

一九六〇年の学園祭から学園祭についての統一テーマが発表されるようになり<sup>(四〇)</sup>、そのテーマに応じて企画が構成され、学園祭が実行されていた【図表七】。その中で今までのような学園祭の在り方についても一度立ち止まって見つめ直し、学園祭にとってなにが必要とされていて、どの部分を改善するべきなのか

といった議論が行われていた<sup>(三三)</sup>。一方で実行委員会の取り組みの遅れや、統一テーマの曖昧さなどが課題となっており<sup>(三三)</sup>、学園祭の全体としてのまとまりが乏しくなっていたが、鴨川グラウンドで開かれた前夜祭には多くの人が参加した<sup>(三四)</sup>。その後の学園祭も前夜祭には人を集めるが、本祭典になると人の集まりが良くないといった学園祭が続いていくことになる<sup>(三五、三六)</sup>。

## 第二節 学園祭の変容

一九六〇年代後半は、全国の大学で学園紛争が行われていた時代であり、立命館大学でも一九六八年の後半から一九六九年の前半頃にかけて、建物が封鎖されたりストライキが行われたりするなど、大きな影響が出ていた<sup>(三七)</sup>。京都大学や同志社大学など紛争の激しかった大学は学園祭が軒並み中止や延期となっていたが、立命館大学をはじめとして紛争の影響が少なかった数校の大学は、予定通りその年の秋に学園祭を実施していた<sup>(三八)</sup>。

一九七〇年代に入ると、学園紛争は徐々に下火に向かうと同時に、若者たちの政治や社会への関心が急速に失速して「シラケ世代」とも呼ばれるようになった<sup>(三九)</sup>。また、長きに渡って続いた高度経済成長も一九七三年の石油危機で下火になり、人々の意識が「カネ」や「モノ」から、娯楽のような「コト」も重視する価値観へと変化することになった<sup>(四〇)</sup>。

学園紛争の余波は立命館大学にもあったが、五月ごろには学内は落ち着き、一月には学園祭が例年よりも長期間にわたって開催されていた<sup>(四一、四二)</sup>【図表八】。やはりその当時の学園祭も社会へのアピールの場とし

ての意義が大きく、社会情勢を反映した企画も行われていた【図表九】。一九六九年に入学したS氏は当時の学園祭の様子を次のように語っている。

（筆者）一九六九年という大学紛争があつた時代になぜ学園祭をする必要があつたのか。やることに意味があつたのか。

（S氏）そうですね。やっぱり社会へのアピールとしてやっているし、毎年違う課題があるじゃないですか。一九六九年だと大管法について大学への管理を強化しようとする法律が成立しようとしていた時期でもあるからやはりそれを反対するということを社会にアピールする一つのセレモニーとして学園祭というものがあつたと思う。（中略）それからサークルとかでもやっぱり当時は自分たちいわゆる身内だけのサークルではなくて、社会にアピールすることがサークルの使命だったので、必ず各サークルは期間中に展示や取り組みをするという暗黙のルールになっていたよね（四三）。

一九七〇年の学園祭は、これまで課題を改善して具体的にわかりやすい統一テーマのもと開催された。以前のようなサークル中心の講演会やシンポジウムだけではなく、模擬店や体育祭などといった多彩な企画や、今までの立命館の歴史の振り返りや、今後の展望と決意を表したような新たな企画が催され、学園祭の企画内容に変化が見られた（四四、四五）。そして、今後の学園祭像として評価されるものとなつたのである（四六）。



翌年の学園祭も前年度の形を継承し、明確なテーマを提示して五つの企画の骨子を明確に打ち出した<sup>(四七)</sup>。また、今までよりも一層クラス単位での取り組みが重視され、全学で学園祭に参加できるようにゼミやクラスを中心とした企画が行われた<sup>(四八)</sup>。【図表一〇】。その結果前夜祭では、過去最高の参加者を集めることに成功し、充実した内容の全学企画も開かれた<sup>(四九)</sup>。その要因としては、クラス単位で参加する企画を用意したこと、学園祭に対する参加意欲が学生の中で大きくなったのである<sup>(五〇)</sup>。また、当時は前夜祭や後夜祭だけではなく、各サークルや各学部自治会が主催する催しや全学企画にも多くの学生や地域の方が参加していた<sup>(五一)</sup>。その後の学園祭では、社会情勢を反映させたものだけではなく、お祭り要素の強い企画も数多く開催されていったのである【図表一一】。

一九七六年の学園祭では、友人との連帯を深め、他大生や市民の方にも参加を促すことを目的として「ビューティフルサンデー」という企画がメイン企画として、この年から初めて開催され、量質共に成果があった<sup>(五二)</sup>。【図表一二】。翌年も、反響が大きかった「ビューティフルサンデー」をメインの企画として位置づけて学園祭が行われるようになっていった<sup>(五三)</sup>。一九七〇年代後半では、全学生を巻き込んだ全学企画や各学部自治会が主体となって取り組む学部企画が登場するなど、様々な人々を取り込んでいき学園祭が取り組まれていたのである。

このように、第一章では一九五〇年代から一九七〇年代後半の学園祭の特徴について明らかにしてきた。学園祭が始まったころの一九五〇年代では、立命館学園創立記念行事の一環として学園祭が位置付けられており、学生と教職員が共に立命館の発展を確認する場として捉えられていた。企画内容の中身としては、サー

クルが中心とした企画が開かれ、サークルの日頃の活動の成果を発揮しようとする傾向が見受けられた。

一九五〇年代後半では新企画の誕生や企画内容の充実が図られ、一九六〇年代前後になると、当時の社会情勢を反映させた企画やテーマが設定されるようになり、学園祭という場を通じて社会に対してサークルの主張を発表する傾向が強くなっていった。その中で学園祭に参画している学生と一般学生との間に意識のギャップやテーマの曖昧さなどの課題もあつた。

そして学園紛争後の一九七〇年代に入ると、従来の創立記念行事としての体質は薄れ、直面している課題に学園祭を通じて自分たちはどうのように向き合っていくべきか問い直すなど、学生の意見を発信する場としての機能が強くなってきた。それと同時に、お祭りの要素のある企画も多く開催され、学園祭の娯楽化も一方で進行していた。

## 第二章 画期を迎える学園祭

### 第一節 進展する総合化

一九七〇年代後半の社会は、二度の石油危機を契機に高度経済成長の時代は終わりを告げ、安定成長の時代へと移行していた。さらに一九八〇年以降は経済活動の国際化・グローバル化が急速に進展し、その中で円高不況やバブル景気という大きな出来事が起こっていた<sup>(五五)</sup>。また、一九八〇年代の大学生は「新人類」世代とも呼ばれており、政治的な熱は無く、モノの消費を通して自分を表現してコミュニケーションを図る傾

向があるとされていた<sup>(五六)</sup>。そういつた中で立命館大学では、一九七九年に全学協議会が開催され、「学園規模問題」「学費改定方式」など今後の学園創造の時代への大きな課題が話し合われていた<sup>(五七)</sup>。そして一九八一年には広小路キャンパスが閉校して衣笠キャンパスの一拠点化が目の前に迫っており、立命館大学が総合大学として大きく変わろうとしていた。

一九八一年の衣笠キャンパスの一拠点化に向けて、学園祭に関しても一九七八年に大きな変化を迎えることになる。一九七八年の学園祭では一九七六年から行われていた「ビューティフルサンデー」がより規模の大きい「衣笠山フェスティバル」と名前を変更して、学園祭のメイン企画として開催された。また、例年広小路キャンパスで行われていた前夜祭、衣笠キャンパスで行われていた後夜祭がこの年から実施されずに「大夜祭」として衣笠キャンパスでまとめて開催されるようになった【図表一三】。その他も二〇〇近い企画が用意されるなど、今までにない数多くの企画が開催された<sup>(五八)</sup>。

一九七八年に学園祭が大きな画期を迎えた背景には、一九八一年に迫った衣笠一拠点化に向けて、企画の集約と組織力の強化があったのではないかと考えられる。一九七八年に学園祭運営に関わっていたN氏によると、当時は次のような議論が行われていたのである。

(筆者) 一九七八年の学園祭を開催するにあたってどんな議論が行われていたのか。

(N氏) 学園祭を規模的にも展開していったって質的にも転換しようっていうね。大きくしてなおかつ高めようっていうことは一つの目標だったね。あと、一九八一年だったかな、広小路キャンパスを

なくして衣笠キャンパス一つにするよね。だから学園祭の企画も衣笠の方に全部集約しようっていうのがあって、そこで衣笠山フェスティバルという大型企画が作られたんですよ。

やっぱり一九七八年になってくると一拠点化っていうのはものすごく目の前のものになってきたからね。その他にも、前夜祭・後夜祭を大夜祭一つにまとめて衣笠で開催するというのは、衣笠一拠点化に向けた布石だよ。前夜祭を広小路キャンパスでやって後夜祭を衣笠キャンパスでやって二回もやるより、一発でどっちも総合的にやってしまった方が派手だし、いずれにしろ数年後には一拠点になるから、ここであるべく広小路の学生もなるべく衣笠に呼んでまえてことだったんだよ。その中で企画数を増やしていくことはやっぱり意識したよね。  
(五九)

それまでの学園祭では広小路キャンパスと衣笠キャンパスで分散して行われていたが、衣笠一拠点化を一九八一年に控え、学園祭に関しても衣笠へ企画の集約や企画数の増加が図られていたのである。また、N氏によると一九七八年以前の学園祭の問題点として次のようなことが挙げられていた。

(筆者) 一九七八年以前の学園祭の総括として何が問題として挙げられていたのか。

(N氏) マンパワーと組織ですね。新たな人材供給源として、七七年に学園祭委員を作ったんです。名ばかりの学園祭委員もいましたが、曲がりなりに、一回生全クラスへ学園祭を流し込むこと

が可能になりました。

今までの組織としては、学友会や自治会の中でそういうことをやるのが好きな人とかを一本釣りみたいな感じで選んでいました。だからそういう点では、人は少なくてっていう脆弱な組織だったんだよね。組織としてはそんなに組織だったものではなかったんですよ。もちろん部屋とか担当者とかはいるんだけど、基本的には自治会とか学友会とかをやってる人の一部がやってるって感じだったね。

でもその体制だと日程的にも人員的にも活発な活動は難しいよねってことで、当時一回生からゼミまで各クラスで自治会の自治委員とかね、そういう役員する人はそれなりに割り当てられていたんですよ。学級委員みたいなね。そのところに学園祭委員みたいなものを作っちゃえて事で、置いたんですよ。そしたら一気に全然別のところからの人材供給っていうか、頭数を含めてね。その中で当然一所懸命やるやつが出てくるから、そいつらがわーっと入ってきてやり出したっていうのが、やっぱり大きくなっていく一番の要因だよな。

そしてそういう形で七七年は一回やってみて、それで経験を積んでノウハウを得た人たちが七八年に二回生で主力となって各企画に取り組んでもっと良いものになったっていう感じだね。で、そのメンバーが七九年、八〇年とやっていくんだよね。だからそこらへんは今までの学園祭とは運営の仕組みが違うよね<sup>(六〇)</sup>。

N氏の証言によると、それまでの学園祭運営に関する組織は、人数も少なく脆弱なものだったが、一九七七年から学園祭委員を各クラス・ゼミから選出するようになった結果、人材を多く集めることに成功し組織力が強化されたのである。そして翌年の一九七八年には去年の経験とノウハウを積んだ学園祭委員のメンバーが主体となって各企画に取り組み、強化された組織をもとに数多くの企画を実施することが可能になった。

翌年の学園祭でも、「衣笠山フェスティバル」や「大夜祭」をメイン企画に据えて行われ、誰でも参加しやすい企画である「立命オリンピック」という新企画も作られた<sup>(六二)</sup>【図表一四】。色んな人が気軽に参加してただただ楽しむことを目的とした「立命オリンピック」などをはじめ、企画数は三〇〇を超えており量的には充実するものだったが、内容の質的には改善する必要があるものもあった<sup>(六一、六三)</sup>。

一九八〇年代に入ってから学園祭では、翌年の立命館大学の衣笠一拠点化に向けて衣笠山フェスティバルを総合祭典として位置づけようと試みられ、今までの課題だった全日休講が実現された<sup>(六四)</sup>。また衣笠山フェスティバルの企画の充実が図られ、初めて夜祭以外で昼間に模擬店が売店できるようになったが、講演会やシンポジウムなどの参加は芳しくないといった課題も見受けられた【図表一五】。一九八一年は、三月に広小路学舎が閉校し、衣笠一拠点化の完成によって総合大学へと歩み出した年であった。その年に開催された学園祭では、一月一日から三日の三日間に「衣笠山フェスティバル」を実施し、短期間に一気に楽しもうという計画や、例年の大夜祭に学生だけではなく、教職員やOBの方も参加できるような試みや六学部が一同に会して大きな取り組みが見られるなど、クラスやゼミ、サークルを基礎とした総合学園祭としての性格がより強く表れるようになった<sup>(六五、六七)</sup>。翌年も「衣笠山フェスティバル」をメインに開催され、その中でも

プロタレント企画であるプロ歌手のコンサートを学園祭の目玉企画として打ち出し<sup>(六六)</sup>、社会問題を取り扱う企画よりも、人を引き付けるためだけの企画が多く見受けられるようになった。

その後の学園祭ではクラス企画として「ダンスパーティー」などといった新企画が開催されたり<sup>(六九七〇)</sup>、「衣笠山フェスティバル」内の企画が模擬店のみになって衣笠山フェスティバル＝模擬店企画になった<sup>(七〇)</sup>。また、「衣笠山フェスティバル」内の企画である以学館前で行われていたステージが、「ユニバーサルステージ」と銘打ちステージ企画として独立し、様々な企画が開催された<sup>(七三)</sup>。さらに一九七九年から行われていた「クラシックの集い」に關しても「クラシック&ジャズフェスティバル」と名前を変え、企画の充実化が図られた<sup>(七四)</sup>。その一方で娯楽の要素が強まっている学園祭に疑問の声も依然として存在していたのである<sup>(七五)</sup>。

## 第二節 大規模になる学園祭

一九八〇年代に入ると日本経済は再び好調になり、一九八〇年半ばから一九九〇年代にかけてバブル景気が現出した。また、所得の向上や第二次ベビーブームの影響もあり、一八歳人口が再び増加して大学の進学率も上昇していた<sup>(七五)</sup>。

立命館大学においても一九八〇年代後半から学生数が増加しており<sup>(七六)</sup>、国際関係学部や政策科学部などの新学部の設置やびわこ・くさつキャンパスの新たな開設など大学規模の拡大化が急速に進んでいた<sup>(七七)</sup>。また当時は昭和から平成に元号が変わる時代の前後ということもあり、「何かが変わるんだ」というわくわく感に包まれ、将来のことを考えるより学生の間をいかに楽しもうかということを考えているという空気がキャンパ

スの中にはあつた（七八）。

一九八七年の学園祭では、これまで行われてきた「衣笠山フェスティバル」という形式をなくし、模擬店企画として独立した全体企画として取り組まれるようになるなど、今までの企画の充実化・独立化が進められ学園祭の娯楽化が見られた【図表一六】。また、この当時の立命館大学は財政的に安定していたこともあり、学園祭の予算が例年よりも多く振り分けられたことで大規模な企画や非常に多くの企画が実施することができていた（七九）。それ以降の学園祭では、一九七八年から始まった「8mm フェスティバル」が「映像フェスティバル」と名を変え企画の充実化が図られ、「ユニバーサルステージ」という形式をなくして、以学館前とバスプール広場前にステージを設け「野外ステージ」企画として様々な企画が開催されるようになった【図表一七】【図表一八】。また、「VOGUE 90」(ファッショントレジャー)・「BEAT REACTION 90」(バンドステージ)・「レッズルフィーバー立命館」など数多くの新企画が実施され、野外ステージも以学館前と中央グラウンド以外にも新たに体育館前にもステージが増設されるなど、引き続き企画内容の大規模化が進展している。その一方で、学部企画や本部企画では社会情勢を考えるようなものも活発に行なわれていた【図表一九】。その後一九九二年の学園祭では、例年非常に盛況している大夜祭の規模をさらに大きくさせたこともあって、学園祭の観客数・参加人数がともに去年を大幅に超えた（八〇）【図表二〇】。学園祭のパンフレットに關しても、この年からカラーのページが作られるようになった。

一九九三年の学園祭では、日程が五日間になりそれぞれの日ごとに、「前夜祭」「アカデミック・デイ」「アクティビティ・デイ」「パフォーマンス・デイ」「後夜祭」というようなテーマが与えられ、テーマにあっ



た多種多様な催し物が実施された<sup>(八二)</sup>【図表二二】。また、学園祭の期間とは独立していた大夜祭が廃止されて、後夜祭に組み込まれたり、模擬店の規定を緩和して学園祭全ての日に模擬店が連日開くようにするなど、大幅な変更が行われた<sup>(八三)</sup>。

一九九四年には政策科学部の新設、理工学部が移転して完成したびわこ・くさつキャンパス（以下、BKC）の開学、セメスター制の導入など立命館大学自体にも大きな変化があった<sup>(八三)</sup>。また、この年の学園祭から初めてBKCでも学園祭が開催されるようになり、衣笠キャンパスとBKCで学園祭を連日行うというような日程を設定し、キャンパス間のつながりが意識された<sup>(八四)</sup>。BKCの学園祭では、理工学部のキャンパスという特色を活かした企画が前面に打ち出されたものや、地域とのつながりを重視した企画が行われた【図表二二】。そして一九九八年にはさらに経営学部と経済学部が移転し、BKCの規模が拡充されるようになった<sup>(八五)</sup>。その後は歴史と伝統の衣笠、地域に根差したBKCというような呼び名が付くほど、それぞれのキャンパスの特性を活かした学園祭が展開されるようになっていき、現在行われている形態になった<sup>(八六)</sup>。プロタレント企画に関しては一九七〇年代にも開催されていたが<sup>(八七)</sup>、当時は主に無名のミュージシャンを招待してライブを行うという形式のものであった。Sさんへの聞き取りの中で、プロタレント企画について次のように語っている。

（筆者）一九七〇年代にもタレント企画みたいなものはあったのか。

（S氏）そうだね。カレッジフォークソングがアングラソングだったという時代だから、来る人はほとん

ど無名の人だったね。でも学生の間ではじわじわと浸透していて有名だった。だから当時の実行委員会は、各地のライブハウスに行つてうまいなーと思つた人を学祭にブッキングしてた。まあでもこつちもお金なかったから安いお金でもなんとか来てもらつてた。それが立命館の伝統だった。それでそのステージにたつて二、三年経つと売れていくわけ。だから立命館の舞台に立つと売れるんだという神話が生まれて、割と自分からステージに立たせてほしいという人もいたね（八八）。

そのころから立命館の学園祭に招待されたアーティストはその数年後に必ず売れるという神話があり、毎年無名のミュージシャンを招待するというような伝統も生まれていた。その後、一九九〇年代後半頃からその伝統は薄れていき、現在のようにテレビに出ているようなタレントを招いてトークショーをするといった人集めの企画へと変質していったのである（八九）。

このように、第二章では一九七〇年代後半一九九〇年代までの学園祭の特徴について明らかにした。一九七七年になると脆弱だった学園祭運営の組織の強化が行われるようになり、一九七八年ごろから約一ヶ月ほどの期間を設けて開催されていた学園祭の日程を短期間に改め、「衣笠山フェスティバル」という大型企画や衣笠キャンパスで「大夜祭」を開催するなど、企画を集約させ、学園祭を総合祭典として打ち出したところにこの時代の特徴がある。これまで広小路キャンパスと衣笠キャンパスに人が分散してしまい、学園祭の一体感が感じられなかったが、一九八一年に衣笠一拠点化が実現し、衣笠キャンパスに人が集まりやすく

なったことの影響も大きかったのではないか。企画内容に関しては、模擬店やプロタレント企画、ダンスパーティーなどといった、とにかくみんなが楽しむための企画が多く用意されていることも特徴である。

そして一九八〇年代後半には、学生数の増加なども影響して学園祭の大規模化が一層進むことになり、模擬店の連日開催や、ステージ企画の増設など現在の学園祭の形式とほぼ同じになった。人集めのなものへと変質したプロタレント企画や模擬店、ステージやダンスパーティーのような企画が中心となったことで、楽しみだけの大学行事という現代の学園祭が形成されていった。

## おわりに

本稿では、『立命館大学新聞』やパンフレットを中心に、立命館大学の学園史の一部である学園祭の企画内容がどのように変化して、どんなターニングポイントを迎えたのかを見出すことを第一の目標として研究を進めた。そして本稿の検討により一九七八年が一つの大きな画期となっていることが見えてきた。

第一章では、一九七八年以前の学園祭について明らかにした。この頃の学園祭というのは、創立記念行事としての性格が強く、大学側と学生が協力して取り組まれていた。その当時の学園祭は立命館大学の歩みや、サークルの日頃の活動の成果を社会にアピールし、学生と教職員が共に立命館の発展を確認する場として機能していた。つまり、その時々大学の課題や、大学を取り巻く社会的・政治的な情勢を自分たちはどう捉えて、どう考えているのかを学園祭を通じて発信していたのである。学園紛争後の学園祭は創立記念行事と

しての性格は薄れて、クラスやゼミを中心とした企画やお祭りの要素のある企画も登場するようになっていったのである。

第二章では、一九七八年以降の学園祭について明らかにした。学園紛争後、学園祭が大学から自立し、自分たちのやりたいことを企画として行い、企画のお祭り要素が強くなっていった。一九七八年は「衣笠山フェスティバル」という大型企画や衣笠キャンパスで「大夜祭」が実施され、企画の集約と企画数の増加が図られた。衣笠キャンパスの一拠点化と組織力の強化によって学園祭の総合化が進展し、その後新学部を設置や、びわこ・くさつキャンパスの開設などによって立命館大学の規模が拡充するようになった。企画の本身としては模擬店の連日開催や、ステージ企画の増設など現在の学園祭の形式とほぼ同じになった。人集めのなものと変質したプロタレント企画や模擬店、ステージやダンスパーティーのような企画が中心となったことで、楽しむだけの大学行事という現代の学園祭が形成されていったのである。

では、最後になぜその時期にそのような変化が生じたのか。その背景は一体何だったのかについて述べて終わりにする。一九七〇年代後半ごろになると、一九八一年に迫った衣笠一拠点化に向けての動きが活発になってくる。一九七九年の全学協議会では「学園規模問題」「学費改定方式」など今後の学園創造の段階に向けた大きな課題が話し合われており<sup>九〇</sup>、その頃の学園祭においても大きな転換が図られていたのである。一九七八年に学園祭が大きな画期を迎えた背景には、一九八一年に迫った衣笠一拠点化に向けて企画の集約と企画数の増加、学園祭運営を担う組織の強化があったのである。それまでの学園祭においては、広小路キャンパスと衣笠キャンパスに分かれて開催されており、前夜祭を広小路キャンパス、後夜祭は衣笠キャン

パスで例年行われていた。しかし、衣笠一拠点化に向けて、前夜祭・後夜祭を衣笠キャンパスで大夜祭として総合的に開催され、様々な企画を集約させた衣笠山フェスティバルという大型企画が登場した。その結果、学園祭は衣笠キャンパスに企画が集約され、企画数の増加が図られるなど、学園祭の総合化が進展したのである。

また、それまでの学園祭運営に関する組織は、人数も少なく脆弱なものだったが、一九七七年に初めて学園祭委員を各クラス・ゼミから選出するようになり、課題であった人手を多く集めることができたため、組織力が強化されるようになった。そして翌年の一九七八年には去年の学園祭運営の経験とノウハウを積んだ学園祭委員のメンバーが主体となって各企画に取り組めるようになり、強化された組織をもとに「衣笠山フェスティバル」や「大夜祭」といった数多くの企画を実施することが可能になったのである。

一九七〇年代後半の立命館大学は、一九八一年に衣笠一拠点化によって、総合大学として歩み出した時代であったが、学園祭においても衣笠一拠点化を見据えて、大型企画の「衣笠山フェスティバル」や「大夜祭」を衣笠キャンパスで開催して、企画の集約や企画数の増加が図られていた。それに加えて学園祭運営に関する組織の強化が行われることで、学園祭の総合化も同時に進展していたのである。

本研究では、『立命館百年史』でも詳細に語られることのなかった学園祭の歴史を辿ってみた結果、その画期は立命館大学全体の画期と軌を一にするものだった。つまり学園祭というのは、大学における重要なファクターだったのである。それを捨象したまま学園史が編纂されるという事態はいつかどこかで大きく塗り替えなければならぬ。

\* なお、本稿は松本力也（立命館大学文学部日本史学専攻四回生、当時）の提出した二〇二〇年度卒業論文を基に、指導教員である山崎有恒（同教授）が加筆・修正を加えたものである。

### 【註】

- (一) 東京帝国大学編『東京帝国大学五十年史』一九三二年
- (二) 冲原豊「大学祭の特色と意義」（『厚生補導』通巻九〇号、一九七三年）
- (三) 天野郁夫「近代日本高等教育研究」（玉川大学出版部、一九八九年）
- (四) 寺崎昌男『大学教育の可能性―教養教育・評価・実践―』（東信堂、二〇〇二年）
- (五) 岩間夏樹『戦後若者文化の光芒―団塊・新人類・団塊ジュニアの軌跡』（日本経済新聞社、一九九五年）
- (六) 溝上慎一「現代大学生論―ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる」（日本放送出版協会、二〇〇四年）
- (七) 尾上正男「大学紛争後の大学文化祭」（『厚生補導』通巻九〇号、一九七三年）
- (八) 冲原、前掲論文
- (九) 山口拓史「時代を映す大学祭―名古屋大学「名大祭」の変遷―」（『大学と学生』一九号、二〇〇五年）
- (一〇) 『立命館百年史』における学園祭の記述は、管見の限り『立命館百年史 通史二』二三六―二四一頁、二四五―二四九頁、三五四―三五五頁、一二二七―一二二八頁、一三四九頁だけに留まっている。ただこうした研究状況は立命館大学の学園史だけではなく、近年の大学史全体に共通する傾向と指摘できる。
- (一一) この新聞社の歴史は古く、一九三九年七月一〇日に前身の冊子『立命館』を創刊してから、二〇一九年で創刊八〇周年を迎えている。第二次世界大戦中は新聞発行を中断したが、戦後間もない一九四五年の二月二九日には『立命館大学新聞』第一号を発行して復活した。発行は学友会だったが、当時の学友会の主要な役職のほとんどは大学職員が占めており、『立命館大学新聞』の編集・発行責任者も大学教員であったことから、学友会の機関誌としての性格が強かった。その後学友会の改組に伴って、発行主体が学生のみで構成される立命館大学新聞部に移管

され、一九四九年に『立命館学園新聞』に題号が変更され、一九五〇年ごろに社名を立命館大学新聞社に変更している（『立命館大学新聞』二〇一八年一月一〇日）。

しかし一九六八年二月に起きた新聞社事件をきっかけに、『立命館学園新聞』は定期刊行を停止され（『立命館百年史 通史二』九〇八〜九一頁）、立命館大学新聞社は学友会から外されることになった。その後、学友会新聞社再建委員会が立ち上がり、一九七〇年に『立命館大学新聞』が発行され、現在に至っているのである（『立命館大学新聞』二〇一八年一月一〇日号）。

（二二）一九六九年に立命館大学に入学。その後一九七一年に学園祭実行委員会に所属し、学園祭の運営に当たっていた。大学卒業後は、立命館大学の職員として学生部などに所属。現在は、立命館史資料センターの職員。

（二三）一九八〇年に立命館大学に入学。在学中は学園祭には何度か参加。卒業後は教員として神戸市の学校に勤務。現在は立命館大学教職支援センター講師。

（二四）一九七六年に立命館大学に入学。在学中は一九七七年から一九七九年まで学園祭の運営に中心的に携わっていた。一九七七年には衣笠キャンパスの責任者、一九七八年は総務担当、一九七九年は相談役を歴任した。現在は立命館大学東京校友会副会長。

（二五）一九八四年に立命館大学に入学。在学中の一九八七年に学園祭実行委員長を務め、学園祭全体の指揮・運営を行った。卒業後は立命館大学の職員として勤務し、学生部などに所属。現在は立命館守山中学校・高等学校事務室に勤務。

（二六）「学園祭の回顧とその意義」（『立命館学園新聞』一九六七年一月一日）には次のような記載があり、一九四八年に学園祭が行われていることが確認できる。

今日、学園祭とか大学祭とかいう催しは、全国どの大学でもよい季節を選んで行われているようである。（中略）わが立命館大学においても、昭和二十三年以来、学園祭を行なってきたから、この秋は二十回目を迎えることになるのではないかと思う。いうまでもなく、初めのころの学園祭と今日のそれをくらべれば、規模にお

いても形式においても大きな差がある。私の記録にまちがいないとすれば、御所内の広場を借りて運動会に似たようなことを何回かやったことがあり、また、衣笠校地の空いた所で私も走ったことがあるように思う。それらを回顧すると、ここ数年來の学園祭は、にぎやかではでなものととなり、大規模になったといわざるをえない。

(一七)『立命館百年史 通史二』二二六頁

(一八)『立命館学園新聞』一九五二年一月一日

創立五十二周年を記念する学園祭は十月十日夜の同立野球戦前夜祭を皮切りに紅葉する東山を背に受けて力強い若人の華麗な祭典の幕を切つて落した。

二十九日には上原、小場瀬両氏を招いて学術講演会が開かれ、映画会、軽音楽演劇などの催しは二十五日から一週間、本学やヤサカグラウンド会館を舞台に盛大に催され、異色ある催しとしては、チャタレイ問題、松川事件をテーマに模擬裁判が開かれるなど、中国、ソビエトの近況を伝える写真展も多大の人気を集め、棹尾を飾る二日の体育大会を前にされた立命館学園創立五十二周年記念学園祭はようやく終幕に近づこうとしている。

(一九)「スローガンに平和と学園復興」『立命館学園新聞』一九五三年一月一日

恒例の学園祭は、さきの中央委員会で決定したように「平和と学園復興」の基本スローガンのもとに今日、全学挙げての多彩な行事の幕を切つておとす。

今年は特に、いままでに見られた種々の欠陥を除去し、全学的なものとするために、全ての団体の代表者で、学園祭実行委員会を組織、全学の親睦、統一を高めようとの機運が高まっている。また催しも多方面に亘り、四日から七日まで開かれる民文連の「祖国展」のように、現在日本が置かれている立場を、明確に提示し、今後の平和運動の指針ともなり得るものが意図されているなど、今年の学園祭が例年と異なる条件の中で行われしかも単に学内のみではなく、平和問題にも直接むすびつくものとして、大きな期待が寄せられている。



学園祭はすでに決定されたように、全学的な基盤の上に構成された実行委員会が、総ての運営に当っており、従って、各学部自治会は間接的に、これに協力する形になっている。

(二〇)「学園祭を盛大にやるう」『立命館学園新聞』一九五三年一月二二日

十一月に入るとすぐに恒例の学園祭が行われる。前期試験も各自の能力を最大限に発揮して終りをつけ、本格的に後期講義に入る前の一つの共通の広場としての学園祭は意義あるものといわなければならない。われわれは、今学園祭を迎えるにあたって学園祭のあり方についての反省と希望とを述べようとするものである。学園祭は、本来、学生と教職員とが一体になり、学校という一つの集団の中で友情と協力を確かめ合い、日ごろの学生同志の疎縁と教職員はじめ学校自体と学生とのへだたりを消滅させること、そして一年間の研究成果を発表するものでもある。(中略)

目の前に学園祭を迎えるわれわれは、この学園祭に平和への意欲を結集させなければならない。平和は話し合いで、というスローガンは学園祭にとつても基本的なスローガンとしなければならない。反動政府が帝国主義者とやりとりしている売国的な動きをわれわれは学園祭で暴露しなければならない。平和を愛する世界の国民の結集がますます増大している今日、学園祭に集るわれわれ学生が遅れてはならないと考えるものである。

わが国は今、重大な歴史の前に立っている。この重大な時期をいかにして平和の方向へ向かわせるかということを学園祭で考えなければならぬと考える。

われわれはこの学園祭を、平和運動に結び付けることに全力を注ぎ、全学生がこの学園祭に結集して盛大に行い、平和への意欲を全学生、全学園のものとして広く全国に表明したいものである。

(二一)「閑散極めた学園祭反省」『立命館学園新聞』一九五四年一月二二日

◀帰郷▶で登校減る

六日のフタ開けから九日間に亘った学園祭は外見だけをみれば、たしかに例年がない立派な、豪華な、そし

て立命館大学学園祭というにふさわしいものであった。予算といい、期間といい、催しの多彩さはプログラムだけでも充分感じとられた。

然し、それだけで学園祭は立派だった。実行委が掲げたような「平和」と「明るい青春」の祭典だったとい切れるだろうか。例年のことながら、学園祭がすんでみれば残ったのは紙屑ばかりだった、ではあまりにもなさけない。ぼう大な予算が組まれたわりに、講演会も展示会もきわ立って立派なもののみられなかった。ある種の講演会など、■が学生ちらほらといった有様で主■研究会と学生の完全？な遊離が感じられ、心淋しい限りだった。

こうした現象は合唱会や演劇、展示会でも感じたことだが、総体に学園祭中の学生の登校がとても少なく、日頃真面目に授業に出席している学生の多くが、格好の帰郷のチャンスだと続々郷里へと帰ったことが原因だと思われるが――。

とにかく、学園祭そのものに対する意識や関心と、実行委を中心に学園祭準備に走り回った各クラブ、サークルの活動的な学生との間に大きな考え方の相違があったことは否めない。

一方、映画会や芸能祭がこうした悪条件のなかで、とにもかくにもべら棒に多い学生を集め得たのはどうしたことだろう。

不十分極まる予算だったかも知れないが、例年から見れば多額だった予算と九日間という長期間、ほとんどすべての学生団体が参加した催しや、展示会の数々、そしてそのわりに多数の学生を動員できなかった学園祭。ということとは、もつと多くの学生が見たり、聞いたりしてくれたら、どんなに有意義だったであろうかとさえ思える学園祭。

(二二) 宮本又郎編『日本経済史』（放送大学教育振興会、二〇〇八年）

(二三) 武田晴人『高度成長』（岩波書店、二〇〇八年）

(二四)「学園祭を全学のものに」『立命館学園新聞』一九五六年一月二一日

(前略)ところで学園祭こそは、本学の学園生活が築いた過去一年に渡る成果の総決算の時であり、学術、学芸、スポーツの各分野の活動の総括の場面である。また豊富なプランのもとに、ひろく学園内部を結合させ、きたるべき学園生活の新たな前進に基礎を与えるものである。さらに学園内部にとどまらず、他大学の学友との交流にもおよび、父兄や一般市民との連携を形成するのである。(中略)

学園祭成功の基準を、われわれは次の二点に求めたいと思う。その一つは、可能なかぎりの広範な学生が参加できる多様な形態のもとに、学園祭の開催を努力することである。ほかの一つは、学園生活の最底辺でそれを支えている、各種の文化的サークルやスポーツ団体にとつて、学園祭がその組織と活動のエポック・メイキングとして、学園祭の内容が準備されることである。(中略)まず想起できることは、自主的創造の場としてのサークルの性格から、教室、自治会、学生大会という場面で進められるべき学生運動が、いやしくもこれを政治動員の足場とみたてることの誤りが繰り返されてはならないことである。また、これが単なる話し合いの場として扱われてはならず、普及活動のカラを破って、学生の研究の上に立ち、従来の■大な科学遺産にとりくむ科学的気風と、たえず相互の批判が行われる厳しさを回復してこそ、各サークルは学園祭活動の中で、新たな学友を掌握できるのである。目前の任務の自覚を、確認しあいたいと思う。

一方、スポーツ団体は、学園に明朗で健康な精神と肉体を保障するため努力している。この現在までの成果を高く評価し、さらに品位の高いものへと前進することを期待する。ともすれば生起する文化と体育の背反を、スポーツ団体が学園祭の中で深く学友をとらえて、平和と民主主義の発見に寄与する中で、その関係を結合するように望みたい。

(二五)「学園祭一般方針なる」『立命館学園新聞』一九五六年一月二一日

九日午後から学生部長室で学園祭実行委事務局会議が開かれ、学園祭について基本的な方針を検討し、事務

局を結成し次のように役員を決定した。

(中略)

体育大会十一月三日

仮装行列＝寮などに広く参加を求めるが、参加数の枠を決め参加料と賞が与えられる予定。

応援団＝対関大戦があるため午前中吹奏楽部が参加、演武公開にも参加する。

各団体の演武公開＝弓道、柔道、空手、射撃、拳闘など全団体の基本の演武を公開する。

ポスター＝広告入りポスターを全市に貼る。

観客＝むしろなどを敷くと同時に、在京の学生に呼びかけ家族を多数来場してもらう。

学芸大会

大講演会＝八日午後。講師を厳選して量質ともに昨年より盛大に行う。各パートごとの講演会は行なわない。

学芸大会

写真、美術、書道、展示会は三日からで、ジャズコンサート＝八日夕六時(新聞会館、府立医大、円山の内)

能楽大全＝十日、演劇部一時、六時、お茶の会、午前十時から四時まで。

こどもの集い＝十一日(学園ホール)

ダンスパーティー＝十一日(弥栄会館)

将棋、囲碁＝十一日鴨川ハウス

前夜祭＝二日夕六時ファイヤーストームを行う。

(二六)「学園祭今やたけなわ」『立命館学園新聞』一九五八年一月二一日

学園祭の中でも例年多数の参加を集める学芸部のサークルでは、すでに発表を終わった立響演奏、ライト・ミュージックをはじめ、これから後行われる演劇発表、映画祭などが今年も中心となり、相当の一般市民の参加があるものと予想する。学術部を中心とする各サークルも、現在の情勢を反映して時事問題を取りあげ

たりしてテーマの選択に注目したり、ゼミナールの運営、展示形式に趣向を凝らすなどして広く学友に呼びかけている。

(二七)「今年の一般方針決る」『立命館学園新聞』一九五九年一〇月一日

一般方針の特長は次の通り

一、学園祭の学友会活動の中での基本的任務は、一般学生、一般市民、教職員を学園祭に結集し、これを通じて学生運動全体のより大きな力とし、反動イデオロギーに対決する力を押し拡げることにある。

一、学園復興の当面の課題が立命館の民主性平和と民主主義を守る先頭に立つ庶民の学園を守り発展させるため、学生を含めての体制化が課題になって来ている中でこの学園祭はこの体制化のために、また学園の無気力を打破するためにも内容の充実を計るべきである。(後略)

(二八)『立命館学園新聞』一九五九年一〇月二一日

【既報】創立五十九周年学園祭は、三日の体育祭を皮切りに十日から十六日まで全学をあげて開催されるが、ことしは例年にくらべて講演会が多く、社会情勢を反映して安保条約、砂川問題をとりあげているところが多い。(後略)

(二九)「人間成長の場を利用しよう」『立命館学園新聞』一九六一年一月二四日

「ソ連の核実験再開、それに続いて米国も核実験を行う」などとまったく恐ろしい。不安な状態の世の中にわれわれは生きているのである。われわれがおかれている現実の環境は決して明るいものではない。解決せねばならない問題が山ほど存在している現在、われわれはどのようにしてこれらを乗り越えて、よりよく発展していったらいいのであろうか。

未来をもっているわれわれ青年にとって、この問題に立ち向かっていくことが当然の使命なのである。今度の学園祭においても、催すことによつて、その中で自分というものを練え、それによつて創造力と豊かな人間性が育成されるのである。冷厳な現実を恐れ、目で体験することを避けるようなことになれば自分で自分

を窮地に追い込むことになるのみである。ある古代哲学者は「人間は苦しみを求め、苦しみを愛する、一番いいものは苦しみである、その求める苦しみの中に楽しみを見出すことが大切なのである」と言っているように、われわれはどんな時にもどんな場においても楽しみを見つけることが出来、この楽しみを見つれることが人間を造ることになるのである。この様な観点から見ると、輝く希望と夢に満ち満ちしているわれわれ若人にとって、心ゆくばかりにうたい、力のかぎり、楽しく踊り、また理を究め芸をみがき、平素学習で修練したところを広く展示する場として学園祭はまことに大きな意義を有している。

(三〇)「華やかなプロ　だが内容に乏し」『立命館学園新聞』一九五八年一月二日  
 まず全般的にみてどうであったのだろう。十七日に開かれた学園祭事務局の総括会議でも指摘されたように「部分的には成長のあとがみられるが、全体としては不十分。参加人数も減少」というのが一般的な評価であろう。

この原因として、各サークル自体に進歩がみられぬこと、機関組織である各自治会が積極的に学生の組織化に取り組まなかったということ。さらに全学あげてという雰囲気がないため、一般学生が興味を示さず登校をしなかったり休暇を利用して旅行するという者が多いという者があげられよう。しかし問題は、もっと根本的に重大なのだが、学園祭実行委員会が夏季休暇前から体制をくめなかったということ。さらにこの委員会が実際にはあまり動かさず学術、学芸の各実行委員会、事務局にまかせきってしまったところに責任がある。

ともかく、プログラムは華やかでも内容は乏しく来年度は今年のままではだめなこととははっきりとしたわけ、「三限の連続体講をやめ、正午から体講にすべきだ」という意見も出てくる。(中略)問題は自治会とクラスの問題をはじめサークルの充実、一般学生の認識の問題など種々あるのだが、その場限りのものとしてみるのではなく地道な日常の中で地固めが必要であろう。(中略)

展示会は、各サークルが問題意識を持っておらず、勉強不足がはっきりとみられねずしも年間の研究成果を

発表しているとはいえない。(中略)

今年の学園祭でなくともいえることだが、大勢集まる催し物と、ほとんど集まらないものにはつきり分かれてしまうことだ。(後略)

(三二) 一九六五年～一九六七年の学園祭では統一テーマの決定はなされなかった。

(三三) 「学園祭によせて」『創立六十二周年記念立命館大学学園祭プログラム』一九六二年

現存する公認団体参加の場合は、年間の各サークルの研究の成果を発表し、さらに全学生一般に、その存在を明らかにし、その上に研究内容の主題を訴え、それに対する批判と意見を求める場として学園祭の位置付けがなされると思う。そのとき、単に参加したらよいという安易さがあれば、学園祭参加の何の意義も失われ、既成事実だけが残ってしまうことになるだろう。自らの成果を世間に問、発表内容の社会的裏づけを得る機会でもあるという認識の上に立って、唯発表した、展示をしたという自己満足におわらず、何年に何を知ってもらうか、何を主題であるかということを確認にして、あくまでも全身を目指す前向きな姿勢でもって、充実した内容を持たねばなるまい。当然以上のことは各サークル内で充分議論されていることであろうし、認識されている問題である。しかし、今迄のわが学園祭における学園祭を振り返ってみて、その内容がどうしても充実できず、また興味を呼ぶものには、仲間なり難しいというのが現実ではなからうか、この現実を深く考え直し、再考慮し、今後の方向に素直に取り入れていかねばならない問題である。(中略)

今年の学園祭は、以上の問題の外に技術的な改良や、情宣活動の改良など、諸問題を合わせ、積極的にアプローチしていく覚悟で取り組んでいる。

(三三) 「土壇場テーマ出る」『立命館学園新聞』一九六四年一〇月二二日

今年の学園祭は、はじめの方針で、テーマは今までのように中央事務局の決定したものを各パートが消化する。いわゆる天下りはやめて、各パートから出たものを統一してテーマを作る、というものであった。これは例年テーマが宙に浮くのを防ごうと、またそれが本来のあり方として注目されていたが、取り組み方が遅

くまた、事務局の何回かの合宿にも拘らず方針の具体化が試験前になされずテーマが土壇場で出されてきた。  
 (中略)

各パート、サークルにおいては、独自の取り組みがなされて来たが、統一テーマの決定が遅れたため一般学生の関心はかなり薄く、悲願のものという感が強い。また、方針の中で、学園祭を全立命のものとするために、クラス単位の参加という新しい形を提起したにも拘らず、統一テーマの設定の遅さが情宣活動を鈍らせ、一般学生にとってはムード的に捉えどころがなくかえって一般学生を引き離したようだ。

(三四)「前夜祭に一人参加」『立命館学園新聞』一九六六年二月二日

学園祭は十二日の前夜祭を皮切りに開かれた。(中略)夕方に入ってII部の部では前夜祭名物ファイヤー・ストームと模擬店がグラウンドいっぱいに拡がり、学生、市民など約一万人が参加した。なお今年は模擬店を出すサークル、クラスが多く広小路キャンパスではせまいため鴨川グラウンドに前夜祭の場所を変更した。前夜祭では小椋広勝氏(末川総長代理)が挨拶をし、「学生諸君がこの学園祭に参加しているとき、世界の同世代の人々が何を考えているのかを考えてほしい」と述べた。また佐高学園祭実行委員長代理は「今年もテーマが決まらずバラバラに取り組まれたのは残念であるが、クラス単位の基盤でこのような多くの模擬店を参加させた。このようなエネルギーを、他の学術的、学芸的なものにつけていこう」と語った。そのあと、前夜祭は午後九時まで続いた。

前夜祭は一人人が参加して盛り上がったけれども、今年も学園祭統一テーマは決まらないため、これでは全学的な取り組みができず散的にしかり組めない状況にあり我々が現在の状況を的確に把握し、学園祭とは何かを真剣に考えなければ学園祭を蘇生できないだろう。

(三五)「学生のいない学園祭」『立命館学園新聞』一九六七年二月二日

創立六十七周年記念学園祭は、十一日の前夜祭を皮切りに十八日迄、広小路、衣笠両キャンパス、市内各会場で行なわれた。前夜祭には、延べ一万五千人の参加があったが、期間中にはいくつつかの催し物が個別的に



人気を呼んだほかは、全般的に盛り上がりならず、全学企画の「テーマ講演」に四十人（衣笠では中止）、「大学問題ティーチイン」に二十人といった状態だった。

〔三六〕「学園祭幕閉じる 全般的に低調ムード」『立命館学園新聞』一九六八年二月二三日

創立六十八周年記念学園祭は十六日の前夜祭で幕をあげ、二十二日まで広小路、衣笠両キャンパス市内各会場で数多くの催し物を繰り広げた。しかし、毎年のことながら一部分の催し物を除いては全般的に盛り上がりならず、とくに衣笠では学生がほとんど顔を見せず、休暇中を思わせるほどの沈滞ムードだった。後夜祭が二十三日に行なわれガラガラした一週間、中身のない学園祭に「ピリオドを打った。今学園祭も、学園祭実行委員会が「歴史的使命に応え、未来を築くわれらの科学と文化の創造を」のテーマを掲げ、学術本部では「学園祭とは何か」と前向きな姿勢で臨んできたのにもかわらず、十分には対処できず問題をさらに大きく来年に残した。

〔三七〕『立命館百年史 通史二』九〇六一九五二頁

〔三八〕「つめたい紛争の余波：学園祭シーズン 軒なみ未定、中止」『京都新聞』一九六九年一月三日

京大では機動隊を導入して正常化に踏み出したとはいえ、文、医学部ではまだ授業も行えず、これまでのゲバ騒ぎで各クラブのボックスや研究室も破壊されている。このため全学的な「十一月祭」への取り組みが遅れ、学園祭の統一テーマもまだ「目下募集中」。日時は今月二十二日から三十日と決めたが、大学側が授業の遅れなどを理由に学園祭の間の授業休止をしぶるなど悩みは多く、細かいスケジュールは全く組まれていないという。

バリケードによる全学封鎖中の同志社大では、EVE（イブ＝学園祭）実行委が期間は今月二十六日から二十九日まで「皮膚と円周率」という難解なテーマを決めて開催準備に大わらわ。しかし各参加団体が「バリケード内のEVEだから趣向を変えよう」といったような意見を出しているため、やはりスケジュールは未定。仏教大や大谷大でも、今月七日ごろから相次いで開催するものの、自治会内部の「お家の事情」があつて準備

も遅れがち。

京都府立医大や京都外大は、紛争で長期間授業がストップしたため、学園祭の時間的余裕がなく、中止となった。また同学会解体問題で急に紛争に巻き込まれた京女大は、これまた学園祭の企画に立ち遅れ、未定。深草学舎を封鎖している竜大も、目下学園祭どころではないという状況。

一方、学園祭が始まった立命館大は、ことし初の試みとして、二日から三十日まで一カ月の長期にわたり、紛争收拾後初の全学的催しとして、各種行事を行うことになり二日午前九時から体育祭が学部やサークルの参加で行われたが、学生の姿も少なく低調。やはり紛争の傷が残っているからだろうか。(後略)

(三九) 溝上、前掲書

(四〇) 芦田徹郎「祭りと現代社会・序説」(『熊本大学教養部紀要人文・社会科学編』二五号、三一―六二頁、一九九〇年)

(四一) 「戦後学園祭略年表」『立命館大学新聞』一九七二年一月一日

今年の学園祭は、全国多くの大学で学園祭が「封鎖」などで中止になったり、あるいは「全共闘」一派の策動で出来なかつたりしているなかで、立命では、例年よりも大規模に行なわれようとしており、その成功は、全国的にも一つの注目を集めているといつてよい。しかし立命に在っても「全共闘」の「文化団体推進会議」を名乗る者たちは「学園祭粉砕」を叫び、この破壊にやっきになっている。彼らは、京大やその他でやってきた「バリ祭」―それはまさに反動のもたらず退廃文化の中に埋没したものだ―が、真の(?)学園祭だといふのだ。(後略)

(四二) 「学内平和 取り戻す」『京都新聞』一九六九年一月二七日

立命大

京大とともに関西の紛争校のはしりになって、昨年末から今春にかけて荒れ狂ったが、今春の「入試危機」を乗り切つてからは、他大に先がけて「正常化」がハイピッチで進んできた。全共闘の中川会館、恒心館封鎖で連日「内ゲバ」や放火さわぎ、リンチ事件など不穏な空気に包まれていた一時のキャンパスの暗い

ムードは一掃され、学園祭も盛大に行われるなど大学は再び、明るい青春の場、によみがえっている。(後略)

〔四三〕【S氏への聞き取り】聞き取り実施日：二〇二〇年三月三十一日、場所：立命館史資料センター

〔四四〕「連日模擬店、GO・GO大会も」『立命館大学新聞』一九七〇年一〇月七日

二日、学園祭実行委員会(委員長、吉田健一君、中央委員長)の第一回会合が開かれ、学園祭への全学的な体制が確立されることとなった。学園祭事務局(事務局長、川合良夫君、L四)はこの日、七〇年度学園祭の第一次企画案を提出。「みんなできくり、楽しく過せ、誰でもが参加できる」学園祭づくりを強調。

京都市民の一割、十五万人を集めて、京都四大祭り、の一つにしようと訴え、実行委員の共感を呼んだ。

予定される日程は、十一月十四日から二十一日まで。最終日は体育祭とされる。前半広小路。後半衣笠中心となるのは例年通りだが、前夜祭と後夜祭にだけ人気が集中することを反省し、模擬店を毎晩行なうことにすることや、連日、多彩な企画を進めることなどが考えられている。また、今年は、本学創立七〇周年にあたるので学園祭企画にも一定反映されている。

〔四五〕「学園祭企画案内」『立命館大学新聞』一九七〇年十一月一日

昨年より六日おそく、八日間を開催期間とする学園祭が十四日夜からはじまる。今年の学園祭は『ふりかえれ七〇年の足跡、築きあげよう七〇年代の歴史』とテーマを決定。本学が創立七〇周年を迎えたことともあわせてその歴史をふりかえり、七〇年代に継承するべき教訓を掘り下げようとしたものである。また、七〇年代へむけての本学の決意を示すことをも狙っていると思われる。学園祭は同テーマに迫る全学企画として、沖縄問題、公害問題を扱った、政治の柱、民主主義の問題を中心課題とする、学術運動の柱、スポーツの柱、学芸運動の柱、遊びの柱の五本の柱を中軸に、立命デー、わだつみデー、沖縄デー、公害デー、そして、前夜祭・後夜祭などと豊富な企画を予定している。昨年は「全共闘」の妨害を寄せつけず二十三日に渡る大規模な学園祭を無事に終え、前夜祭では一万二千人もの市民、学生の参加があったのに対し、①今年、前夜祭、後夜祭あわせて十五人のフォークシンガールの出演を予定し、昨年を上回る規模となりそうであ

る。例年にならない充実した企画で、期間的には八日と短い、思い出深い学園祭となるであろう。

#### ―前夜祭 一四日―

一年間の大学生活三百六十五日中、学内が最も活気づくとき。創立七〇周年を記念した本年の学園祭前夜祭は十四日午後五時に広小路キャンパスではじまる。当夜は清心館前の中央に燃えるファイヤーを象徴として、ステージと八十軒の模擬店が店出しすることになる。ステージは清心館の前に設置し、個人、団体を含めて二十以上の出しものがある。現在確定しているところでは、プロのフォークシンガーが十グループ程度予定されている。(中略)プロのシンガーを呼ぶ場合、出演料、交通費などの相当の出費を要するが、フォークポロのリーダー中島君(文学部四回生)のあっせんで一人平均一万円程度に抑えることができた。学園祭事務局の狙う「楽しい学園祭」は財政に差程の負担をかけることなく、その雰囲気づくりに成功するだろう。

一方の模擬店の方は昨年と同程度の規模で、一部関係五十パー、二部三十パーの八十パー、その大半は飲食物でバザーが四、五軒程となろう。いつもは寒々とした十一月も中旬の夜のキャンパスは、この夜ばかりは人いきれと模擬店の裸電球の燈火で熱気に包まれファイヤーの赤い炎は学生の熱情を呼び覚ますにはおかない。

#### ―園遊会 一五日―

前夜祭の夜が明けて翌日一五日は七〇周年記念園遊会が衣笠以学館前、午後二時から五時までの予定されている。この園遊会企画は今年の学園祭がはじめて企画したもので例年にならない新しい試みの一つといえよう。この新しい企画は主として学生と教授、卒業生の交流を目的とし、一般市民への参加も求め、市民との広い交流をも期待したのである。(後略)

#### ―立命デー 一六日―

立命デーは本学の七〇年の歴史を紹介しようとする日である。研心館四階では午後一時から末川博名誉総長講演「立命館七〇年の思い出」とともに、新総長によって三〇分程の短い講演が行なわれる。その後、同じ

研心館四階でフランス映画「道」の上映のほか、本社による「七〇年の歴史パネル展」の企画がある。本社は創立以来七〇年間の本学の歴史を視覚を通して訴えるもので、古いネガの入手にさまざまな困難はあるが、昭和二十八年わだつみ像を本学に迎え入れた当時、京都駅から市内パレードを伝える写真、最近のものでは四十四年一月の中川会館封鎖から、「全共闘」の機動隊導入まで、揺れ動く学内情勢を鋭く記録した写真などがある。

—沖繩デー 一八日—

戦後二十五年間、米軍の占領支配下で国政参加の権利さえも奪われていた沖繩。この十五日、沖繩では衆参両議院選挙の投票日に当る。七〇年代初頭のわが国にとって重大な情勢を迎えているとき、学園祭に沖繩デーを設けたことは評価されよう。この日は以学館一号で午後三時、映画「沖繩」の上映ならびに以学館二号では午後一時より、アジア、アフリカ評議会事務局長、秋庭稔男氏の沖繩に関する講演がある。(後略)

—公害デー 一九日—

これも学園祭の特色ある企画の一つ。映画、パネル、五政党の演説会、講演会と、この日のテーマを様々な角度から追求する。映画は、ニュース映画「公害列島」が以学館一号で十二時半に、パネル展は以学館前で民科法律、公害問題研究会、理工学部自治会。公害問題特別委員会が写真展示をする。また、五党演説会は以学館二号で午後一時から開会する。昨年は出席拒否の政党が出て実現しなかったものだけに各党の公害政策は傾聴に価する。講演は三時から以学館三号で大阪市大教授宮本憲一氏が講師。(後略)

(四六)「学園祭を振り返って」『立命館大学新聞』一九七〇年二月二日

本学の学園祭では、統一テーマサブテーマ胎動せし祖国の土より／蒼ざめた時代をつらぬく／君よ！変革の科学を—／新しい時の到来をつげる／君よ！青春の輝き—／かぎりなき創造の炎を／燃え立たせよ！—の下に、「政治の柱」、「學術運動の柱」、「スポーツの柱」、「学芸運動の柱」、「遊びの柱」という五本の柱を設けて、ものごとを全体的に把えていこうとする大胆な試みがなされたと思われる。それらは結果的には、様々

な評価がなされているが、今年度の学園祭は、物事を全体的に把えるという方法の礎を築いたものとして高く評価できるであろう。(中略) 今回の学園祭の全体をながめてみると、その成果は、学園祭の運動論としての基本的な形―統一テーマ・サブテーマそれに基づく五本の柱―の設定。模擬店にのべ三〇〇店が参加したということ、学生の主体的な参加として評価できるであろう。

(四七)「学園祭を追う」『立命館大学新聞』一九七一年九月二二日

一九七一年の学園祭は十月二十一日から十一月末までの長期間にわたって開催される。

今年度は、第二次学園闘争の到達点にたつて「民主主義と学問の砦」立命館大学の構築めざす闘いのなかで迎えるという条件下、昨年以上の取り組みで全学生と府市民を結集した一大祭典として成功させるという内容で昨日学友会・文化部の基本的方向で方針が発表された。(中略)

今年の学園祭の具体的な企画としては、五つの柱を設定して取り組みたい。第一は、沖縄、安保、ベトナム、公害などの全人民的政治課題の柱。この中では、パネルディスカッション、シンポジウムなどを企画していきたい。

第二は、立命館大学民主化闘争と大学教育問題の柱という形で、立命大民主化闘争の到達点がよくわかる企画、中教審答申の批判などを行っていききたい。

第三は、学術、文化、スポーツの柱。この中では、ゼミナール大会、スポーツ祭典などを学部を中心にして行うとともに、サークルの一年間の成果を全学生に返していくような企画を自主的に企画してほしい。

第四は、前夜祭、後夜祭を中心とした遊びと府市民との交流の柱である。この中では、第三の柱とともに最大限、クラスからの自主性が発揮され、モギ店などを積極的に取り組んでほしい。

第五は、学部祭典の柱である。各学部の実行委員会、自治会が責任をもって企画し、各学部の特長を生かしたシンポジウムなどを行っていく。

以上が五つの柱の大体の骨子である。これをあくまでも、クラスからの創意性、自主性によって、どんどん

豊かな内容にしていかなければならない。

(四八)「学園祭を追う」『立命館大学新聞』一九七二年一〇月一三日

(二)七、八割の学生が参加する学園祭

(前略)

まず最初に現在の情勢を踏まえ、七一年の学園祭の性格と任務について簡単に述べてみたい。第一に、元来、学園祭は、「学術・文化・スポーツ活動の一年間の成果の一大祭典」としての性格を持っており、今学園祭がスポーツ・文化・学術の一大総合祭典として取り込まれる。そして第二に、学園民主化闘争、学費闘争の到達点に「学問と民主主義の砦立命」の構築というたたいの上に立つて、全学連が提唱する七〇八割の学生運動を發展させる立場から、一層広範な学生の参加と内容ある祭典にするのである。

(中略)

以上の点に立つて、今までの本祭典が、前夜祭、後夜祭における「飲み食い型」のサークル中心だったのが、後で明らかにするように、今学園祭は「飲み食い型」の楽しい企画も一層發展させるとともに、祭典企画全体が、「クラスの日常の学習会、たたかい、レクリエーションを集約したもの」として發展させ、クラスを基礎にした取りくみが行なわれる予定である。だから、クラス、ゼミ、サークルの自主的、民主的、主体的な運動が期待されている。同時にその運動を包括する全学実行委員会の責任が以前に比べ、一層重要なものになつている。

(四九)「創造への第一歩」『立命館大学新聞』一九七一年一月一七日

秋をいろどる行事、学園祭、体育大会は三日から、本祭典は、六日の前夜祭を皮切りに、十三日まで開かれた。ことしは、例年になく、前夜祭に、延べ五万人が詰めかけ広小路キャンパスは、文字通り人、人、人。映画「橋のない川」の上映成功、各学部、学生会主催のゼミナール大会など、まさしく「創造への第一歩」となる取り組みであった。(中略)

前夜祭をもちあげるもう一つの催し物。それは模擬店である。今年は一七〇余店が店出しをした。クラスで討論に討論を重ねて参加したクラス。一つのクラスで二つ、三つの店を出しているところ、様々である。今年、例年になく繁昌したらしい。あるクラスでは一万円ばかり黒字を出したとのこと。

学園祭事務局の発表によると、この日の参加者は延べ五万人、今までで最高。

(五〇) 【S氏への聞き取り】聞き取り実施日：二〇二〇年三月三十一日、場所：立命館史資料センター

(筆者) 一九七〇年ごろの学園祭の様子はどうだったのか。

(S氏) やっぱりクラスの半分以上は参加していて、クラスからなにかしようというのが一つのまとまりだったからね。やっぱりみんな楽しみにしてたし、みんな学園祭には参加してたね。すごい人だったよ。学友会も当時おらかだったので、稼いだお金は自由に使ってた。だからみんな必死に稼いでみんなでコンパしたりしてたね。

(筆者) 当時の雰囲気は具体的にどんな感じだったのか。

(S氏) さっきも言ったけど、やっぱりクラスで出そうという機運がありましたよね。学友会もそれに援助していた。例えば学友会が五〇〇〇円援助するので、それを元手に店を出すとか。やっぱりみんなクラスで出しものとかしてるし、友達も店とかしてるから自然と学園祭には来ちゃうよね。そういうのってあるよね。あと、大学や教職員も一体化してたので、教職員も出店をして後片付けも一緒にやって夜遅くまで活動して、その後みんなでご飯を食べたりして一体感があって、ご近所の人もそれを楽しみにしてた。なので日頃迷惑をかけていることもあって無料チケットを配布したりした。ステージに関しても今はお金をかけて業者がするでしょ？当時はお金がないから舞台も全部手作りで、照明も自分たちでやってた。呼ぶ歌手の人も当時無名のフォークソングの高田渡さんとか高石ともやさんとか五〇〇〇円くらいで来てもらってたね。



(五二) 【S氏への聞き取り】聞き取り実施日…二〇二〇年三月三十一日、場所…立命館史資料センター

(筆者) その当時一番盛り上がっていた企画はあったのか。

(S氏) やっぱりね前夜祭かな。後夜祭はあんまり盛り上がりがないけど。前夜祭なんかだとOBの人が参加したりして、OBと市民と学生と教職員とで一体感があった。模擬店はクラスで出すからまとまりができるよね。でも模擬店だけじゃなくて校舎でやってる催し物？みたいなやつにもみんな参加してたね。前夜祭ほどでもないかもだけど、それでも結構多くのお客さん？学生がパネル展とかそういうのを見に行ってたね。まあそっちの企画もおもしろかったからそりゃ盛り上がるよね。でもやっぱり一九七〇年ぐらいの秋っていうのは学園紛争はほぼ沈静化してるので、学生からしてみるとやっとな自分たちが好きなように表現できるというような雰囲気があったっていうのも事実だね。

(五二) 「企画あらかると」『立命館大学新聞』一九七六年一月五日

ビューティフルサンデー

▼一月七日 衣笠

学園祭のメイン中のメイン。サークル展示あり、映画あり、演劇あり、歌ありのカラフルなサンデー。夜には、ファイヤーを囲んでのフォークダンスが待っている。

いままでの学園祭に満足しない人にも参加してもらおうということと共に、衣笠周辺の人をはじめ幅広い市民の参加も意図している大企画である。(後略)

(五三) 「量質ともに成果 学園祭が閉幕」『立命館大学新聞』一九七六年一月一九日

「あれくるう海、若き創造者たちを帆を張れ、舵をとれ、輝く明日へ向かって」をテーマに、七六年度学園祭は、一月六日から八日間にわたって開かれ、昨年より三万人、多い約七万人の学生や市民が参加した。(中略) 今年初の試みであった「ビューティフルサンデー」を四千人の参加で成功させるなど、量質共に、大きな成果をおさめて、閉幕した。(中略)

ビューティフルサンデー人気コンサート

ビューティフルサンデーは一月七日(日曜日)衣笠学舎で行なわれ、学生、市民、子どもたちなど約四千人が参加した。これは、①日曜日、国民に開かれた大学として、本学の学術、文化、スポーツの到達段階を、他大生、市民に知ってもらう、また友情を深めるという二つの目的で、今年から、初められたものである。当日は、全京都夜学生交流集会や核物理研究会の「核融合」の展示、また、女子学生企画の映画「わが青春のとき」の上映なども行なわれ、人気を集めた。

午後四時から、以学館一号教室で行なわれた、「紙ふうせん」西岡たかしのコンサートには、会場定員の二倍近く一五〇〇人が集まった。以学館一号教室の入口から開場を待つ人の列は、東門まで延々と続き、さらにUターンして、なお後に続いた「紙ふうせんが聞きたくて、衣笠学舎まで、たずね、たずねやってきました。とても良かったです。寒いところ並んだかきがありました」(京女、二回生)などという感想も聞かれた。

(五四)「これがビューティフルサンデー」『立命館大学新聞』一九七七年一〇月二八日

この「ビューティフルサンデー」は昨年新たに取組まれたもので、今年もメイン中のメインとして、全学的に取り組みが行なわれている。今年の「日曜日」はいったいどんなものになるのだろうか?実行委ではどんなイメージを持っているのだろうか?学生は何を期待しているのだろうか?それを追ってみた。(中略)もっと大きな企画に 学生の声

今年のビューティフルサンデーに期待する学生の声を拾ってみた。「春のビッグ・フェスティバルのような誰でも参加できる形で進めて欲しい。学内だけではなく、学外からも多数の学生が参加するので、京都のビッグ・フェスティバルのように大きな目標をもってくれたらと思う。」(一部文、二回生・Y君)

「昨年はおもしろかった。一回生の時は、このように一般学生が誰でも楽しめる企画がなかったと思うので、学園祭の一週間がダラダラと過ぎていったと記憶している。この企画を組んでから、分散しがちだった学生の動向が一つにまとまったようだった」(一部文三回生・S君)(後略)

(五五) 宮本、前掲書

(五六) 溝上、前掲書

(五七) 『立命館百年史 通史三』八八―一一八頁

(五八) 「78学園祭 未来へ大きな軌跡残す 全日程終了」『立命館大学新聞』一九七八年一月二四日

二日の仮装行列、三日の「衣笠山フェスティバル」、四日の夜祭、五日の「広小路祭典」、六、八日の演劇祭典、最終日のミュージックフェスティバル。「フィナーレ」と全体で取り組まれた目ぼしい企画だけでも、多くあるのに、クラス・ゼミ・サークルから、それぞれ創意工夫して用意した企画を入れれば企画数だけでも二百を優に超える。まさに「学園祭」というにふさわしい企画数ではあった。(後略)

(五九) 【N氏への聞き取り】聞き取り実施日…二〇二〇年一月一九日 実施方法…電話

(六〇) 【N氏への聞き取り】聞き取り実施日…二〇二〇年一月一九日 実施方法…電話

(六一) 「趣向をこらした企画 誰でも参加できるもの」『立命館大学新聞』一九七九年一月二六日

誰でもすぐ参加 衣笠山フェスティバル

四、五日両日に行われる、衣笠山フェスティバルは将来全日休講となった場合の短期集中型の大学祭を目ざしたもので、七九年学園祭のメインとなる企画。まず四日は中央グラウンドで午前九時から「立命スポーツ祭典」(体育祭主催)が行なわれる。サッカー、バレー、バスケット、ソフトボールなどの各種球技の決勝大会。大文字マラソン(一〇km) 衣笠マラソン(五km)。女子学チーム対総長チーム・ソフトボール大会、などのほか、立命対京大のサッカー招待試合などが企画されており、見るスポーツから参加するスポーツを目的としており今年で三回目を迎えるこの祭典は参加者も大幅に増え従来の学部対抗からクラス対抗になっている。(中略)

五日は、囲碁大会(以学館前広場)ミュージックフェスティバル(以学館一号)などが企画されているが、なんといつてもおもしろく、誰でもすぐ参加できそうなのが、今年から新しく企画された「立命オリンピック」

場所は以学館前広場と特設ステージ。内容はスピードガンによる球速測定。コープランチ早食い競争。自転車遅乗り競争。コーラ早飲み競争などアトラクシヨンの企画で一風変わったおもしろく楽しい文字通り誰でも参加できる企画として期待できる。(中略)

ファイナール 大夜祭

いよいよ七十九年度学園祭のクライマックス十日の大夜祭。夕闇せまる中央グラウンドで、二百余のクラス・ゼミ・サークルからの夜店が並び、ファイヤーストームを囲んでの炎の祭典となる。日本一という立命名物の夜祭で、飲めや歌えの大騒ぎ。ステージでは学内バンド演奏や応援団の演武なども演じられ、約一週間のロングラン学園祭も、秋の夜長とともにその終わりを告げる。この夜祭の特長は、日本一の夜祭と言うほどの参加模擬店の数、六メートルにも及ぶファイヤーストームと、中央グラウンド一面を、学園祭のファイナールの場として盛り上げようというものでお祭り好きの立命大生の気質が一番よく表われる場であるといふことである。

(六二)「八十年代に向けた取り組みの大きな成功で」『立命館大学新聞』一九七九年一月九日

(前略) 昨年からとりくまれるようになった「衣笠山フェスティバル」を四日、五日の両日に企画した点や、各種マラソンや、学部段階での対抗戦を勝ち抜いた勝者を集めてのバレー、バスケット、ハンドボールなどの決勝大会を大きな柱にした「スポーツ祭典」が大きなとりくみの中、成功した点など学園祭の前半をふりかえてみると、その意図は比較的達成されたのではないだろうか。(後略)

(六三)「今年の学園祭を見て」の面の向上「通年的」取組み 来年度も課題に」『立命館大学新聞』一九七九年一月一六日

(前略) 全体企画をはじめとして、個々のクラスゼミ・サークルなどで準備された企画数は三百近くあり、その「量」は学園祭にふさわしいものになっていったと思うが、反面「質」の面では、クラス企画参加が約二十。それも内容的には喫茶ディスコといった「当世の時流を追ったもの」で比較的「安易」にとりくめるものが

大部分であった点を、今年も感じた。「楽しければそれでいい」と言う意見もあるかもしれないが、無原則的に、ただ「楽しさ」だけを求めることが学園祭に参加することになるのか、一考を要するところがあると思う。

(六四)「三・四日衣笠山フェスティバル」『立命館大学新聞』一九八〇年二月五日

四日は全日休講

衣笠山フェスティバルが行なわれる十一月四日(火)は全日休講になることが、このほど大学当局との交渉で確認された。これは学園祭の企画、全学的取り組みの高揚、また学生大会でも問題として取り上げられたように全日休講を要求する声の高まりなどをふまえた上で決定されたもの。ここ数年来、学園祭の大きな課題となっていた全日休講の問題であったが、衣笠一拠点化を来年に控え、衣笠山フェスティバルを全学的総合祭典として、短期集中的に行なおうという試みにとつて全日休講は大きな意味を持つと言える。

総合祭典をめざす スポーツ・音楽など多彩に

学園祭のメイン行事とされている衣笠山フェスティバルは三日、四日の二日間、大々的に行なわれる。

これは昨年までの衣笠山フェスティバルの成功を基盤に、来年度完了する衣笠一拠点の下での学園祭の総合祭典としての位置づけで発展をめざすものである。それだけに今年の衣笠山フェスティバルは昨年とは少し違ったところがみられる。(中略) クラス・サークル企画では昨年は十足らずであったが、今年は四十近くの参加があり、衣笠山フェスティバルは全員参加の「お祭り」となってきた。

(六五)「創造・若人の秋」『立命館大学新聞』一九八一年一月二十五日

一拠点化密度濃く盛大に

(前略) 一日から三日までは「衣笠山フェスティバル」。一拠点化初の学園祭ということで、一部六学部二部五学部が一同に会して盛大な取り組みが見られる。また今年も、中央企画や主な催しがこの三日間に集中して行なわれ、短期間で一気に楽しもうという計画。(後略)

楽しみな企画目白押し

(前略) 恒例の大夜祭は七日、中央グラウンドで行なわれ、学園祭の最後を飾る。今年と同じ日に千人が出席して行なわれる校友会大会がありOB達にも大夜祭に参加してもらい、交流を図ろうという計画もある。また学生だけではなく産業社会学部、法学部、二部の事務室からの模擬店出店もあつて教職員、学生一体となつたお祭りにしようという趣向だ。

(六六) 「学園祭 全学の力で成功」『立命館大学新聞』一九八一年一月一日

各企画、趣向をこらす 八十周年企画も充実

今年の学園祭は初めて衣笠一拠点化のもとで、十月三十一日から十一月七日まで華々しく行なわれた。今年の特徴は第一に十一月一日から三日まで集中的に行なわれたこと。第二に、今焦点になっている「行政改革」や「国際障害者年」などに機敏に対応した企画が多かつたこと。第三に、八十周年記念事業を組み入れ、成功したことである。さらに、大夜祭の大盛況。レーザー光線による盛り上げなどは特筆できるだろう。しかし、休講措置の問題、クラスからの取り組みがまだ弱いなどの問題は今後の重要な課題であろう。

(六七) 「新登場レーザー光線」『立命館大学新聞』一九八一年一月一日

夜祭をビックに演出 模擬店 地域の人も舌つづみ

立命館の学園祭のメインイベントは、何といつても大夜祭である。ファイヤーストームの炎が、夜空を照らし、レーザー光線の新兵器、ステージではロックのライブ演奏、そして立ち並ぶ店・店・店。昼過ぎから始められた出店作りは、四時過ぎにはほとんど完成して客を待つばかり。出店は中央グラウンドには入りきらずに、バイク置き場までのみ出していた。

あいにくの寒さで人の入りが心配されたが、六時ごろには、もう足の踏み場もないほどの大盛況。地域の人たちもたくさんきていた。(後略)

(六八) 「盛りだくさんの企画」『立命館大学新聞』一九八二年一月一日

今年の学園祭は、十一月二日から六日まで開催される。衣笠一拠点化が完成して二年目だけに、より充実し

た学園祭が期待されるところである。(中略)

五日にはクラシックの集いがある。これはプロアーティストを招き、学内パートと競演してもらおうというもの。また同じ五日、すでに恒例となった上方落語会も催される。さて、今年のプロタレントの招へいは渡辺香津美引きいるカツミバンド。プロタレントと学園祭は切っても切れない関係であり、今年企画の中でも目玉となる。

(六九)「衣笠ゆるがず学園祭」『立命館大学新聞』一九八三年十一月十五日

今年も多くの出会いが…

十月中旬の寒さで、昨年より紅葉が早かった今秋。その寒さは学祭が始まると停りをみせた。厚手のセーターが厄介なものになるほど、陽気な日よりが続いた学園祭期間、キャンパスは大勢の人々にぎわっていた。(中略)今年から初めて行われたダンスパーティー。存心館地下食堂をいじくり、ダンスフロアをつくりあげた。チケットの前売りが好調で、盛況は予想されたが、当時はそれを上回る人が押しよせた。会場はイモをあらうがごとし。(後略)

(七〇)「学園祭トビックス」『立命館大学新聞』一九八五年二月一日

「Funky Avenue」

学園祭事務局では今回の学園祭でパフォーマンスショー「Funky Avenue」を催すことを予定している。これは、最近、若者の間で流行語ともなっている「パフォーマンス」ということを敏感に取り入れた新企画と言える。このショーは十一月三日、バスターミナル前にて十一時四十五分から四時まで行われ、出場・見学は無料である。参加形態は、サークル・プロゼミ・学内パートなどの団体の自由参加で、一パート二十分程度の時間でそれぞれの「パフォーマンス」を演じる。(後略)

「鉄人衣笠杯争奪戦」

十一月二日、午後二時から四時半ごろまでレスリングパフォーマンズ「鉄人衣笠杯争奪戦」が行われる。この企画は以学館前広場にて大規模な特製リングを設置して、野球の「立同戦」ならぬレスリングの「立同戦」を行うものである。プログラムには、おもしろおかしく観客の前でプロレスを演じるコミックあり、タッグマッチ、シングルマッチなど真剣勝負ありと、観客が笑うことも、興奮することもできるようになっている。

(後略)

(七一) 「KINUGASAYAMA FESTIVAL」『84年学園祭パンフレット』

学園祭と言えばみなさん何を想像しますか？やはりキャンパスに立ち並ぶさまざまな模擬店を想像されるでしょう。こので立命の学園祭の模擬店と言えば夜祭が有名ですが、毎年昼間にも模擬店が行われています。それがこの衣笠山フェスティバルです。キャンパス全域を使って三日間という長期にわたって行われる盛大なこのイベントにぜひあなたも参加してみませんか？そして大いに騒ぎ、楽しもうではありませんか！この衣笠山フェスティバルを通じて、新しい友を見い出すかも、あるいは旧友との思わぬ再会が待っているかもしれません。そしてクラス・ゼミ・サークル内での仲間の存在を再確認し、親睦を深めるよい機会となるでしょう。さあ集まれ若人よ！衣笠山フェスティバルへ。

(七二) 「UNIVERSAL STAGE SHOW」以学館前『84年学園祭パンフレット』

学園祭のお祭り広場、以学館前ステージが今年から新企画をたくさん盛り込んで変身します。その第一弾として十一月二日「GALS STORM84」と銘打って、今まで立命館大学で発表の場が少なかった、女の子バンドばかりを集めた音楽祭典を催します。いつものステージとは一味違ったものをお送りしますので、一見の価値あり！です。第二弾として十一月四日の「大学対抗お祭り合戦！」。日頃交流のない京都の大学が数校集まって、その代表がゲームを競い合い、一番大学を決定します。この日は他大学の友達も誘ってぜひとも以前に集合！そのほかに飛び入り参加のできる立命オリンピックや、立命クイズ大賞(仮題)なども催しま



すので、今年のユニバーサルステージには乞うご期待!!

(七三) 「Classic & Jazz Festival」『84年学園祭パンフレット』

音楽の真髄はここにあり

伝統的にすぐれた音楽であるクラシックを大学学園祭ならではの安価な料金で学生のみなさんにお送りした企画「クラシックの集い」も過去五年にわたって、非常に好評を得てきました。今年にはクラシックの心に残る繊細なメロディに加えて、軽快なリズムに乗ったホーンセクションのパワフルなサウンドを駆使したJAZZすなわちBigBandを他大学との競演という形でとりいれ、より一層充実したステージにしていきたいと思っております。

(七四) 「学園祭の意味を考える」『立命館大学新聞』一九八四年一月一日

最近、多くの学園祭がマスコミ文化の影響とも思える商品化された企画で満たされ「人呼び」「売り込み」を主目的とした方向に偏りがちな傾向がある。テーマに関しても響きのよい抽象的な横文字が多くなり、自己啓発や社会を風刺するようなものは少ない。遊びの要素が大きな比重を占め、学術・文化の祭典としての学園祭は失われつつある。(中略)

学園祭は学術・文化・スポーツ活動の総集約と飛躍の場であり、学生の学問・文化・スポーツ・レクリエーション活動への要求を実現していく場でもある。従って、社会情勢と密接につながりを持ち、学園祭を創り上げていく上では、学生の多面的な要求とエネルギーを結集することと、大学と社会の現状をしっかりと見つけていくことが必要になってくる。お祭り重視の考え方、参加拒否の姿勢からは学園祭の成功は望めない。今一度、一人ひとりが学園祭の持つ意味を問い直し、全員で取り組み参加するという原点にたちもどる必要があるだろう。

(七五) 溝上、前掲書

(七六) 『立命館百年史 通史三』二二〇頁

(七七) 同右、四六一五九頁

(七八) 【K氏への聞き取り】聞き取り実施日：二〇二〇年一月二日 場所…立命館守山中学校・高等学校

(筆者) 一九八〇年後半頃の大学の雰囲気はどんな感じだったのか

(K氏) 私が学生をしていたころは、昭和から平成になるころであって、なにか変わるんだというワクワク感があつた時代です。今学生をして将来社会人になるんだということを考えるよりも、学生の間をいかに楽しもうかということを考えていた。どうせ就職するときはみんな一緒なんだということもあつて先のことを考えてなにかするということよりは、その時の瞬間を謳歌したいという空気が強かつたように感じます。

(七九) 【K氏への聞き取り】聞き取り実施日：二〇二〇年一月二日 場所…立命館守山中学校・高等学校

(筆者) 一九八七年の学園祭ではどのような特徴があるのか。

(K氏) この年は全学協の年で、その前の前にあつた七九年ではいわゆるダブルスライド制なるものが提案された年で、その後八三年に学費の段階的値上げが行われました。八七年というのは逆にそのダブルスライドが安定してきた時期で学費的な部分も含めた学園の財政としては、収入が確保でき、長期計画が組めるような時期になってきた。だから高度成長のあとのダブルに行く行かないのところでそうなつてたよね。八七年の転機としては、これは自分でも思うんだけど、八六年との決定的な違いは、学友会費から出るお金が初めて二十万を超えたんだね。当時の値段で。それまでは緊縮財政だったから、どうしてもお金のかかるものはやりにくかつた。でもこれまでのお金だけでは足りないってなつて今年は二十万つてなつたね。

(八〇) 「魅力ある学園祭とは」『立命館大学新聞』一九九二年二月二日

今年の学園祭は、参加人数、観客数共に昨年を大幅に上回った。学術サークルの参加団体は十パート以上が増加し、三十数パート。観客数も大夜祭では、父母懇談会の利用による父母参加の呼びかけ、出店場所を中

央グラウンドからキャンパス全域に拡大したことで約八万人が集まったという。人数が増えたという点から見れば、学園祭が盛り上げるための努力が実っているので評価できる。(後略)

(八一)「学園祭 Revolution」『立命館大学新聞』一九九三年一〇月二三日

今年の学園祭には様々な変化が見られるが、一番大きいのは日程が五日間になり、さらにそれぞれの日に一つの大きなテーマを与えていることだろう。五日間は「前夜祭」「アカデミック・デイ」「アクティビティ・デイ」「パフォーマンス・デイ」「後夜祭」の五つに分かれ、それぞれのコンセプトにあった催し物が行われることになる。また今までは学園祭とは独立していた大夜祭が廃止になり、後夜祭の中にそのまま組み込まれている。(後略)

(八二)「模擬店だって変わった!!」『立命館大学新聞』一九九三年一〇月二三日

今まで学園祭に来て「なんで祭りなのに模擬店がないの?」と、思っていた学生も多いだろう。しかし今年からは違う! 学園祭期間中どの日に行っても模擬店が出て、祭りを盛り上げるのに一役買う事になっている。今年は模擬店の規定が大幅に緩和された。中でも注目すべきは、上限の撤廃だろう。今まで制限されていた模擬店販売物の単価が、今年から自由になった。つまり今までにない豪華なものを取り扱った模擬店が出てくる可能性もある。また飲食物以外の模擬店も充実させるので、今までと一味違う模擬店に遭遇できることだろう。しかし、何よりも、何となく淋しかった学園祭期間中の学校に、今年から模擬店が色どりをそえることになるのは嬉しい。

十月中旬時点で、後夜祭の模擬店に申し込んだ団体は二八〇以上。最終的には三〇〇店と大夜祭規模になる見通し。前夜祭や他の学祭期間に申し込んでいる団体も多い。「なんてったって学園祭は模擬店」という人には、今年の学園祭は楽しいひと時になるはずだ。

(八三)『立命館百年史 通史三』八四〇—八四七頁

(八四) 「94学園祭 つながるキャンパスBKCC―衣笠」『立命館大学新聞』一九九四年一〇月二〇日

BKCCで開幕

学園祭の初日は今年度開学したBKCCでオープニングが行われる。当日のテーマはBKCC開催にふさわしく「立命新時代への模索」。二極化した立命のネットワーク作り、BKCC独自の文化性の創造を目指す。これを受けて地域密着を重視した企画や、理工学部の特徴を生かした企画が充実した施設で展開される。二十日以降は場所を衣笠に変えて行われる。

(八五) 『立命館百年史 通史三』七〇〇―七〇八頁

(八六) 【K氏への聞き取り】聞き取り実施日…二〇二〇年一月二日 場所…立命館守山中学校・高等学校

(筆者) 一九九四年からのBKCC学園祭とは当時はどんなものだったのか。

(K氏) 職員の立場として見ていて、当時のBKCCが頑張っていたのは、衣笠と違って地域の人にとって新参者である大学なんだから、例えば家族が車でバンバン来てくれてその人たちが楽しめることを何かしようという声もありました。これは衣笠でできないことをあえてBKCCでやろうというものだったね。だからすごく不思議な思いをしたのが、私が学生部に居て衣笠の学園祭をサポートした時と全然違うのがあって、当時のBKCCの実行委員会の人々は、どうやったら家族の人たちが来てくれるのか、どうしたら滋賀県のファミリー層に打ち出すことができるのかを考えていた。これは、実は龍大が一歩先に行っていたと。

展開を大津にしたのも龍大が先だし、あのキャンパスに人を呼び込もうとすると、学園祭を軸にしながらというのは、一歩か二歩先にやってた。BKCCでそれが本格的にできるようになったのは、九四年から九八年までのことを礎にしつつ、九八年からやつぱりそうやってきたから、そこから後の今のベースになっているのは確かにそうだね。一つ何か違うものをキャンパスが違う中で何か生み出そうと意識として具体的に言われていたのはそういうところだね。

(八七)「学園祭を飾ったシンガーたち」『立命館大学新聞』一九八一年一月二五日

(前略) 学園祭をさらに華やかに彩るのがプロのシンガーたち。彼らの歌声は、七〇年代前半は主に夜祭のステージで、後半はコンサートなどで参加者たちを魅了し、燃えあがらせた。このような企画は七一年の上条恒彦を最初に、学園祭のメイン企画として楽しまれている。

(八八)【S氏への聞き取り】聞き取り実施日…二〇二〇年三月三十一日、場所…立命館史資料センター

(八九)【O氏への聞き取り】聞き取り実施日…二〇二〇年三月三〇日、場所…立命館大学衣笠キャンパス

(筆者) 一九八〇年代ごろの学園祭はどんな様子だったのか。

(O氏) 僕らの時は、ちようと広小路から衣笠に移ったころやつてん。僕が通ってた四年間のうち、いつかわすれたけど、五輪真弓って知ってる？その人が売れる前に学園祭にきてステージで歌ってたんや。それからどんどん売れていったんや。なんかあれは先見の明があるなあと思っただ。でも今はこう、有名な俳優さんとか女優さんみたいなタレントさんが来て、トークするって感じやん？八〇年代後半くらいからかな？まあ確かに人は集まるかもしれんけど、なんかねえ、今までの伝統みたいなんあったからちよつとどうなの？って思うよね。

(九〇)『立命館百年史 通史三』八八―一一八頁

## 【図表】

※旧字体は適宜、新字体に改めた

図表一 創立五〇周年記念学園祭プログラム

日程	催物	時間
14日(土)	児童福祉の集い 映画会「荒野の抱擁」	午後1時、6時 午後6時
15日(日)	大茶会 関西交響楽団カルテット演奏会 美術・写真展覧会(21日まで)	午前9時～午後5時 午後5時 午前10時～午後5時
16日(月)	全日本大学招待弁論大会 学術講演会 大河内一男(東大教授) 中村 哲(法政大教授)	午後1時 午後5時
17日(火)	演劇「われ幻の魚をみたり」 能楽会	(20日まで上演) 午後1時～8時
18日(水)	学内討論会 2部弁論大会	午後1時 午後5時
19日(木)	全立命館軽音楽会	午後2時、6時
20日(金)	関西4大学軽音楽会	午後5時
21日(土)	ダンスパーティー 模擬国会 全立命館合唱発表会 学術講演会 前芝確三(法教授) 梯 明秀(経教授) 橋本 循(文教授) 竹多義一(理工教授)	午後0時半 午後1時 午後5時 午後2時
22日(日)	体育大会 関西交響楽団演奏会	午前9時～午後3時 午後5時
28日(土)	同・立野球戦	午後1時

(出所) 立命館百年史編纂委員会編『立命館百年史』246～247頁から引用

図表二 1953(昭和28)年から1955(昭和30)年の学園祭のスローガン

年度	スローガン
1953(昭和28)年	平和と学園復興
1954(昭和29)年	平和で明るい学園を作ろう
1955(昭和30)年	親友や家の人、下宿のおばさん、ありとあらゆるまわりの人を誘って学園祭へ参加しよう。そして恋人も!

(出所)『立命館大学新聞』1972年11月1日より作成

図表三 学園祭プログラム

日時	プログラム
一日（日）	PM・一時～六時 軽音楽大会（大学院三階ホール） PM・一時 二部学術研究発表会・秋季弁論大会（研心館三階）
二日（月）	AM・十時 貿易講演会（存心館十六号） PM・一時 東洋史学講演会（文学部四〇七号）、映画会（学園ホール） PM・六時 ドイツ語リードの夕（研心館三階補室）
三日（火）	AM・八時半 体育祭（御所今出川グラウンド）
四日（水）	AM・十時 カトリック講演会（存心館十六号） PM・一時 学内法律討論会（研心館三階）、五時半 時局講演会（同） PM・六時 演劇（大学院三階ホール）、新中国の夕（大学院三〇五号）
五日（木）	PM・一時 ソヴィエト心理学講演会（文学部八号）、一部秋季弁論大会（存心館十六号）、ダンス（学園ホール） PM・五時半 学術講演会（学園ホール）
六日（金）	PM・三時～八時 能楽（金剛能楽堂）
七日（土）	PM・一時 幻燈人形劇（立命館高校講堂） PM・一時～三時 放送研究発表会（学園ホール）
八日（日）	PM・一時 英語弁論大会（研心館三階）、茶道会（法然院）

（出所）『立命館学園新聞』1953年11月1日より作成

図表四 「学園祭のおもな催し」

<p>体育大会 6日（日）御所グラウンド 仮装行列、阿波踊り、スペイン闘牛、その他</p> <p>学芸大会 10日（木）～15日（火） 学内・映画祭、放送劇、人形劇、合唱祭、美術展、写真展、書道展 学外・軽音楽大会～先斗町歌舞練場 演劇大会～同じく ダンスパーティー～岡崎公会堂 能と狂言～金剛能楽堂</p> <p>学術大会 6日（日）～15日（火）学内各教室 大講演会（13日）『平和と今日の思想』古在由重氏 『研究と民衆』藤間生大氏 研心館四階 模擬裁判・弁論大会・展示会</p> <p>理工大会 7日（月）～9日（水）衣笠理工学部 学術講演会・映画祭・学芸大会・展示会</p> <p>その他 ファイヤーストームと歌と踊り・県人会野球大会・クラス対抗ソフトボール</p>
---

（出所）『学園祭 立命館大学創立55周年プログラム』より作成

図表五 1958（昭和33）年の学園祭プログラム（11月11日以降）

日程	企画内容
11月11日	自主映画祭「鼓動」（映画制作部）、うたごえのついで（オンチコーラス）、 討論会「自治活動はどうあるべきか」（民科経済、経自）、 討論会「日本女性史をめぐって」（女子学生会）
11月12日	憲法討論会「海外派兵の義務を定める条約の効力」（憲法研究会）、 映画祭「この天才をみよ 崖」（映研）
11月13日	研究発表と討論会「前期自然主義文学をめぐって」（日文研、文学ゼミ実行委）
11月14日	放送劇「椅子」「八甲田山」など（RBC、理工放送局）
11月15日	演劇祭「にしん場」「結末のない話」（新劇研、学生劇場）
11月16日	学術講演会「現代資本主義と不況」「日本思想の潮流」

（出所）「学園祭今やたけなわ」『立命館学園新聞』1958年11月11日より作成

図表六 1959（昭和34）年の学園祭で開催された講演会

団体名	企画内容
民科法律	模擬裁判「砂川事件上告審」で、広く一般市民および学生に訴え、現代日本政治の 真実をえぐり出す。
国際問研	シンポジウム「平和共存と日本の立場」 講師毎日新聞社編集員那須聖氏
法律相談	岩国市での家族法に関する実態調査の分析、日常法律相談の結果を発表。一般市民 に対してとくに家族法の普及につとめる。
民科政治	シンポジウム「太平洋戦争悲史－現実の政治にいかに対処すべきか－」で今後の日 本の歩む道を追求する。講師は清水慶三氏の予定
雄弁会	政治、法律を主題とする討論付弁論大会を開催参加弁士十六名。 講師は前島省三助教授
地理学研	滋賀県伊香郡西浅井村菅浦における夏期総合調査研究をグラフなどにして発表する。
英米文研	「シェークスピアについて」の演題で都立大学総長矢野峯人氏、京大教授中西信太 郎氏の講演会を開く
RBC	学園ホールで放送祭を行い学生放送の認識を高める。 講師は中川牧三氏の予定
英会話	英語劇「オウドのタイコ」講師はチャクラバティー氏を予定
歴史研	展示会「立命館六十年史」と、講演会「安保条約と歴史の課題」を開く。

（出所）「学園祭の準備進む」『立命館学園新聞』1959年10月21日より作成



図表七 学園祭の統一テーマ

年度	統一テーマ
1960 (昭和35) 年	戦後大衆運動の課題
1961 (昭和36) 年	国民文化、国民教育の創造と大学の使命
1962 (昭和37) 年	現代日本の思想と行動～学問の自由と学園の自治～
1963 (昭和38) 年	既成からの脱出
1964 (昭和39) 年	創造運動は我々に可能か
1968 (昭和43) 年	歴史的使命に応え、未来を築く、われらの科学と文化の創造を
1970 (昭和45) 年	ふりかえれ70年の足跡、築き上げよう70年代の歴史
1971 (昭和46) 年	71年、沖縄……三たび迎える歴史の激動 起て、民主主義と学問の砦 立命の隊伍 黎明を我が手に
1972 (昭和47) 年	72年秋 立命館大学学園祭未来にむかい激動の歴史に かけよう統一の旗 輝かそう真理と正義の炎を燃やそう創造への意欲を 学問と文化の若きにないてとして
1973 (昭和48) 年	結集しようあらゆる歩みとあらゆる英知と科学を礎に 創りあげよう国民のための学問と文化を
1974 (昭和49) 年	民主主義破壊の思想攻撃の中で、歴史の主体者として、真に自主的で民主的な学問・文化・スポーツの探求と創造を
1975 (昭和50) 年	民主的な日本建設の一翼を担う国民への成長をめざして
1976 (昭和51) 年	あれくるう海 若き創造者たちよ 帆を張れ舵を取れ 輝く明日にむかって
1977 (昭和52) 年	若人よ、今こそ、飛び立て、嵐をついて、鍛えあげた翼を広げ、新たな大地に
1978 (昭和53) 年	未来のために、今をみつめよ
1979 (昭和54) 年	時代を拓け若き力で、語ろう明日を、我らの未来を
1980 (昭和55) 年	歴史を創る種たちよ、時代に根を張り真理の芽を吹け
1981 (昭和56) 年	翔べ明日を担う者たちよ、80年の歴史を超えて
1982 (昭和57) 年	EVER ONWARD～限りなき前進～
1983 (昭和58) 年	SEEK TRUTH～真理を求めて～
1984 (昭和59) 年	CREATIVE POWER～創造する力～
1985 (昭和60) 年	SAIL UP～混沌の中からの脱出～
1986 (昭和61) 年	NEVER LOSE OUR IDENTITY AND ORIGINALITY ～目覚めよ「新人類」たち！？ 21世紀に向けて～
1987 (昭和62) 年	時代ニ応答セヨ
1988 (昭和63) 年	疾風怒濤'88
1989 (平成元) 年	90へはじめの一歩
1990 (平成2) 年	脳細胞を驚掴み
1991 (平成3) 年	私たち、可能性のタマゴです
1992 (平成4) 年	2万通りの個性を未来に投影する
1993 (平成5) 年	立命から世界へ 立命から未来へ
1994 (平成6) 年	ひとつ次の時代へ～創造への模索～

(出所)『立命館大学新聞』1972年11月1日、1973年11月9日、1974年11月1日、1992年10月21日より作成

※ 1969年の学園祭テーマについては不明。

図表八 「総合スケジュール」

〈前半〉		〈後半〉	
11月2日(日)	体育大会・衣笠グラウンド	11月24日(月)	テーマ講演会・研4
11月5日(水)	テーマ講演会・研3	11月25日(火)	映画会・以1
11月6日(木)	映画会・以1	11月26日(水)	全学フェスティバル予選
11月7日(金)	野党四党討論会・以1	11月27日(木)	大学法廷・研3
11月8日(土)	前夜祭	11月28日(金)	講演会・以1
11月10日(月)	テーマ講演会・研4	11月29日(土)	全学フェスティバル 後夜祭
11月11日(火)	映画会・学園ホール		
11月12日(水)	安保法廷・以1	11月30日(日)	高校生のつどい

(出所)『学園祭』より作成

図表九 一九六九年の学園祭企画

## テーマ講演会

- ・11月5日(水) P.M.12:30～2:30 研3 「安保廃棄と統一戦線」
- ・11月10日(月) P.M.1:00～3:00 「佐藤訪米と安保・沖縄」
- ・11月24日(月) 研4 「新しい文化の創造と我々の任務」
- ・11月28日(金) P.M.1:00～ 以1 「歴史的転換期における学生の生き方」

安保法廷 安保法廷実行委員会 11月12日(水) 午後1時から

大学法廷「裁かれる全共闘」大学法廷実行委員会 11月27日(木)

野党政党討論会 11月17日(月) 1:00～ 以1

出席党 民主社会党 公明党 日本共産党

1. 佐藤訪米 安保・沖縄問題

1. 大学、教育問題(文化、スポーツ、含む)

1. 議会制民主主義問題

注 五党政党討論会にするつもりで自民党、社会党にも依頼しましたが両党とも出席を辞退されました。

## 高校生のつどい

高校生みなさん! 浪人みなさん!

立命では学園祭の一環として11月30日に高校生のつどいをやろうと思っています。

いやな、しかしやらねばならない受験勉強の生活、何か胸のハケ口のない生活、そうしたものを吹っ飛ばして、一日楽しく語らい、遊ぼうではありませんか。そして私達の未来は決して暗くないことを私達大学生と話し合ひましょう。安保廃棄・大学民主化の嵐に、その道を切り開きましょう。

フォークダンスをやったり、友情論、受験問題・恋愛論・社会問題、安保、大学問題を胸を開けて語り合おうではありませんか。

## 女子学生会

11月7日講演 “変りゆく婦人像” 映画「乳房を抱く娘たち」

11月8日分科会(安保・学園民主化・就職・生き方・女子学生運動をすすめるために) 応援団

Cheering Festival 11月13日(木) 祇園会館(無料) 17:30～21:30

第一部 プラスバンド演奏 第二部 リーダー部演舞公開

## 体育大会

11月2日(日) 衣笠中央グラウンド

種目 借り物競走 タマころがし 騎馬リレー 学部対抗リレー 二人四脚 綱引き

(出所)『学園祭』より作成

図表一〇 「全学企画スケジュール一覧」

広小路学舎		衣笠学舎	
3	スポーツ祭典開始 体育大会 衣笠グラウンドにて		
5	仮装行列 P.M.12:00～		
6	チビッコ広場 P.M.3:00～	前夜祭 P.M.5:30～	
7	スポーツ祭典集中日 衣笠グラウンド、御所グラウンド		
8	パネルディスカッション 「安保・沖縄」 P.M.1:00～	映画「橋のない川」 P.M.5:00～	パネルディスカッション 「安保・沖縄」 P.M.1:00～
9	弾がい裁判「司法反動化」 P.M.1:00～	映画「禁じられた遊び」 全学フェスティバル 寄席 P.M.5:00～	パネルディスカッション「大学教育」 P.M.1:00～
10	講演「インドシナ戦争の諸問題」 P.M.1:00	映画「男はつらいよ」 P.M.5:00	ティーチイン「公害」 P.M.1:00～
11	ティーチイン「戦争体験」 P.M.1:00～	ダンスパーティー P.M.5:00～	近代経済学とマルクス経済学 P.M.1:00～
12	キャンパス討論「現代政治の展望」 P.M.5:00～		
13			後夜祭 P.M.5:30～

(出所) 『71年学園祭パンフ』より作成

図表一 「全学企画スケジュール一覧」

広小路学舎		衣笠学舎
3	スポーツ祭典開始 体育大会	
11	前夜祭 映画祭 (10月のレーニン) モギ店 ステージ ファイヤーストーム、 ダンスパーティー	
12	映画祭 (キクとイサム、真昼の暗黒) 子供の広場	高校生・浪人の集い
13	ミュージックフェスティバル 映画会 (男はつらいよ)	全京都学生討論集会 ステレオコンサート
14	ベトナム法廷、文学講演会、 映画・講演会	映画 (鉄道員・ジョーヒル) 講演会 (マルクス経済学と近代経済学)
15	映画 (日本の中のベトナム、ニクソン・ノー) シンポジウム「基地・安保・インドシナ」	フォークフェスティバル 二部衣笠祭典
16	全学フェスティバル、講演会	講演会 (私学問題を考える) 映画 (白い巨塔・軍旗はためく下に)
17	映画 (不滅の足跡、対決 '71、霧の旗) 講演会「広がる革新自治体」	三合唱祭 (メンネルコール、混声・若者)
18		後夜祭 (演劇祭、モギ店、ステュージ、ファ イヤーストーム・ダンスパーティー)

(出所) 『72 学園祭パンフ』より作成

図表一 1976年度学園祭全学企画一覧

体育祭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 総長杯争奪体育大会 学部・クラスエントリー対抗 (11月3日)</li> <li>・ スポーツ大会</li> <li>・ 第4回学内レガッタ (10月24日)</li> <li>・ 立命杯争奪庭球トーナメント (11月4日～11日)</li> </ul>
前夜祭 11月6日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ファイヤーストーム、模擬店、ステージ</li> <li>・ 仮装行列</li> </ul>
ビューティフルサンデー 11月7日	<ul style="list-style-type: none"> <li>〈衣笠ピックフェスティバル〉</li> <li>・ ファイヤーストーム&amp;フォークダンス</li> <li>・ スポーツ大会</li> <li>・ 合同寮祭</li> <li>・ ステージ (西岡たかし、紙ふうせん)</li> <li>・ 映画祭典「わが青春のとき」「ライアの娘」</li> <li>・ ちびっこ広場</li> </ul>
全体企画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 10・31 全京都夜学生スポーツ祭典 (10月31日)</li> <li>・ 全京都夜学生交流集会 (11月7日)</li> <li>・ 上方落語会、立命寄席 (11月8日)</li> <li>・ 1976年度全学教研集会 (11月11日)</li> <li>・ ミュージックフェスティバル (11月12日)</li> <li>・ 映画祭「同胞」「キッド」「望郷」「彼岸花」「炭とダイヤモンド」</li> <li>・ 生協強化月間「文化講演会」「パネル展」(11月25日)</li> </ul>
学部企画	<ul style="list-style-type: none"> <li>〈文学部〉</li> <li>・ 「治安維持法下に青年はいかに生きたか」(11月12日)</li> <li>〈法学部〉</li> <li>・ 講演・シンポジウム「就職危機を考えよう」(11月12日)</li> <li>〈経営学部〉</li> <li>・ 連続講演会「現代資本主義を見る目」(11月9日10日)</li> <li>〈経済学部〉</li> <li>・ 講演「口疑獄にみる日本経済の構造」</li> <li>・ 映画「望郷」(11月9日)</li> <li>〈産業社会学部〉</li> <li>・ 講演「自由と民主主義の擁護発展を！未来の担い手として」</li> <li>・ 映画「抵抗の詩」(11月8日)</li> <li>〈理工学部〉</li> <li>・ 講演「管理社会におけるコンピューターの発展方向」(11月9日)</li> </ul>
学術本部企画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講演「日本経済の進路と二つの経済学」(11月12日)</li> <li>・ 講演会「経済民主主義原価公開」(11月9日)</li> </ul>
学芸本部企画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伏魔殿ライブ (11月6日～13日)</li> <li>・ 山下洋輔、日野あきら JAZZ CONCERT (11月19日)</li> <li>・ 映像散華抄 (11月26日～30日)</li> <li>・ 小川国夫文芸講演会 (11月10日)</li> <li>・ BLUS FORK CONCERT (12月4日)</li> </ul>
後夜祭 11月13日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ファイヤーストーム、ステージ、模擬店</li> </ul>

(出所)『76年学園祭パンフレット』より作成

図表一三 1978年学園祭全学企画スケジュール一覧

オープニング 11月2日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮装行列</li> <li>・立命演劇祭典</li> </ul>
衣笠山フェスティバル (金体企画) 11月3日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立命スポーツ祭典、マラソン大会</li> <li>・上方落語会、立命寄席</li> <li>・長谷川きよしコンサート</li> <li>・学内8ミリ映画フェスティバル</li> <li>・ミュージックフェスティバル</li> </ul>
大夜祭 11月4日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模擬店、ステージ</li> </ul>
学部祭典	<p>〈法学部〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講演パネルディスカッション「有事立法とは何か？」(10月5日)</li> </ul> <p>〈文学部〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なんでもやろうよフェスティバル(囲碁・将棋大会、ピラで見る文自の歴史展、交換バザー、TVゲーム、ソフトボール大会)(11月3日)</li> <li>・講演会「教師をめざす青年学生に求められているもの」(11月6日)</li> <li>・「共に語ろう 明日の教育！」(11月7日)</li> </ul> <p>〈経済学部〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・政治座談会「有事立法をどうする」(11月7日)</li> </ul> <p>〈経営学部〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講演会「経済民主主義と経営学・会計学」(11月6日)</li> <li>・講演会「多国籍企業」(11月9日)</li> </ul> <p>〈産業社会学部〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講演会「5年目のレポート～金大中事件の前とあと～」(11月7日)</li> </ul> <p>〈理工学部〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就職問題討論会「不況下の理工系学生の就職状況と望まれる姿勢」(11月6日)</li> </ul>
学術本部企画 11月2日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講演「現代・若者・文化論」、シンポジウム</li> <li>・映画「若者たち」</li> </ul>
学芸本部企画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連続講演会「差別と表現を考える」(10月28日、11月18日)</li> <li>・管弦祭(11月4日)</li> <li>・映画「金柑少年」(11月11日)</li> </ul>
フィナーレ 11月8日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・music FESTIVAL</li> <li>・京大 VS 立命激突サッカー</li> <li>・大フォークダンス</li> <li>・映画「ライアの娘」「大地の子守歌」</li> <li>・演劇上演</li> </ul>

(出所)『78年学園祭パンフレット』より作成

図表一四 1979年学園祭全学企画スケジュール一覧

11月2日	・ オープニングパレード 仮装行列
11月3日	・ 法学部企画 講演会「最高裁は今」、大バザー、ゲーム大会
11月4日	・ 文学部企画 素人演芸会 〈スポーツ祭典〉 ・ 立命スポーツ祭典、マラソン大会 〈衣笠山フェスティバル〉 ・ ミュージックフェスティバル ・ ミュージカル「ヤングジェネレーション」 ・ BORO コンサート ・ 映画「ジョーイ」 ・ 8ミリフェスティバル ・ 大上留利子コンサート
11月5日	〈衣笠山フェスティバル〉 ・ ミュージックフェスティバル ・ 映画「ハウス」 ・ 高木麻早コンサート ・ 学友会企画 パネル展「ベトナム「難民」とカンボジア問題の真相」 ・ 立命オリピック ・ 学芸本部企画 学館カイホウの日
11月6日	・ 演劇祭典 ・ 学術本部企画 講演「今日の日本の現状と'80年代を展望する」
11月7日	・ 学友会企画 パネルディスカッション「深まり行く私学危機と'80年代の私学像」 ・ 文学部企画 映画「モダンタイムス」、風刺マンガ展 ・ 経済学部企画 映画「すばらしい友だちアントニーノ」 ・ 産業社会学部企画 討論集会「立命大生の姿」
11月8日	・ 経営学部企画 講演会「現代学生の質的变化と欲求・知的関心の傾きは…」 ・ 理工学部企画 進路を語る会
11月9日	・ 上方落語会 ・ 映画「あ、小麦峠」
11月10日	〈大夜祭〉 ・ 模擬店、ステージ

(出所) 『79年学園祭パンフレット』より作成



図表一五 '80年学園祭パンフレット全学企画スケジュール一覧

11月1日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮装行列</li> <li>・演劇祭典</li> </ul>
11月3日	<p>〈衣笠山フェスティバル〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・模擬店@以学館前広場（午前11時～午後4時30分）</li> <li>・ミュージックフェスティバル</li> <li>・映画「アルプスの少女ハイジ」</li> <li>・立命スポーツ祭典（マラソン大会、運動会）</li> <li>・クラシックの集い</li> <li>・フォークダンス</li> <li>・8ミリフェスティバル</li> <li>・青空ピンポン</li> <li>・経済学部企画 講演「これからの家庭像」</li> <li>・産業社会学部企画 シンポジウム「今、わたしたちは何を目指して飛びたつのかー産社創設15周年を迎えてー」</li> <li>・理工学部企画 フィーリングカップル</li> <li>・学術本部企画 講演「今日の社会状況と学術文化」</li> <li>・学芸本部企画 三文役者Live</li> </ul>
11月4日	<p>〈衣笠山フェスティバル〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・模擬店@以学館前広場（午前12時～午後4時30分）</li> <li>・ミュージックフェスティバル</li> <li>・映画「ケンタッキー・フライド・ムービー」</li> <li>・青空ピンポン</li> <li>・五輪真弓コンサート</li> <li>・学友会企画 講演「私とスポーツ」</li> <li>・文学部企画 フォークコンサート</li> <li>・経営学部企画 講演「ビートルズ&amp;ポップ・ディランベスト曲鑑賞」 第二回立命オリンピック</li> </ul>
11月5日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文学部企画 永井潔講演会</li> <li>・学芸本部企画 上映会「ブラックエンベラー」</li> </ul>
11月6日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学芸本部企画 管弦祭</li> </ul>
11月7日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上方落語会、立命寄席</li> </ul>
11月8日	<p>〈大夜祭〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・模擬店、ステージ</li> </ul>

(出所) 『80年学園祭パンフレット』より作成

図表一六 1987年学園祭スケジュール一覧

10月30日	・スポーツ大会（ソフトボール、バレーボール）
10月31日	・仮装行列 ・上方落語会、立命寄席 ・法学部企画 講演会「21世紀への憲法」
11月1日	・ユニバーサルステージ（Gals Storm '87、立命オリンピック、Quiz 立命オープン） ・昼間の模擬店 ・クラシックフェスティバル ・シネマフェスティバル「オーバー・ザ・トップ」 ・文学部企画 映画上映会「愛と青春の旅だち」 ・演劇祭典 ・バスプールのステージ ・松岡直也グループコンサート ・劇団新感線 学園祭特別講演「熱海殺人事件」
11月2日	・ユニバーサルステージ ・昼間の模擬店 ・ミュージックフェスティバル ・人間映画館「泥の河」 ・シネマフェスティバル「七人の侍」「羅生門」 ・8mm フェスティバル ・ダンスパーティー ・演劇祭典 ・スポーツ祭典 ・バスプールのステージ ・学術本部企画 展示会「新選組」
11月3日	・ユニバーサルステージ ・昼間の模擬店 ・産業社会学部企画（学内オリエンタリング） ・ミュージックフェスティバル ・景山民夫講演会 ・シネマフェスティバル「天空の城ラピュタ」 ・8mm フェスティバル ・JAZZ祭'87 ・理工学部企画 講演会「超電導とは？」 ・演劇祭典 ・バスプールのステージ
11月7日	・'87大夜祭（模擬店、ステージ）
11月11日	・経済学部企画 映画「海と毒薬」
11月14日	・学友会企画 講演会「今、真実に肉迫する」
11月17日	・学芸本部企画 映画「キャバレー」

（出所）『87年学園祭パンフレット』より作成

図表一七 1988年学園祭企画スケジュール一覧

11月1日	・理工学部企画 記念講演会「超電導の科学と技術」
11月2日	・学術本部企画 浅田彰講演会「彷徨する若者文化とマスメディア」
11月3日 開会式	・仮装行列 ・近藤等則コンサート ・上方落語会、立命寄席
11月4日	・野外ステージ（以学館前） ・昼間の模擬店 ・落合恵子講演会 ・映画「風が吹くとき」 ・映像フェスティバル ・シネマフェスティバル ・演劇祭典
11月5日	・野外ステージ（以学館前・バスプール前） ・昼間の模擬店 ・映画「ミリィ〜少年は空を飛んだ〜」 ・映像フェスティバル ・シネマフェスティバル ・ダンスパーティー ・国際関係学部・学術本部共催企画 田畑茂二郎講演会 ・法学部企画 映画「松川事件」 ・学芸本部企画 「たてかん ペインティングコンテスト」 ・演劇祭典 ・月蝕歌劇団 学園祭特別公演
11月6日	・野外ステージ（以学館前・バスプール前） ・昼間の模擬店 ・ミュージックフェスティバル ・クラシックフェスティバル ・映像フェスティバル ・シネマフェスティバル ・映画「オネアミスの翼」 ・経済学部企画 映画「ラストエンペラー」 ・学友会・産業社会学部共催企画 映画「喜劇 拝啓天皇陛下様」 ・JAZZ祭 '88 ・スポーツ祭典 ・演劇祭典
11月9日	・経済学部・経営学部共催企画 就職シンポジウム
11月10日	・ばんぱひろふみ講演会
11月12日	・大夜祭（模擬店、ステージ）

『'88年学園祭パンフレット』より作成

図表一八 1989年学園祭企画スケジュール一覧

11月2日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開会式</li> <li>・仮装行列</li> <li>・昼間の模擬店</li> <li>・上方落語会、立命寄席</li> <li>・スポーツ祭典</li> <li>・国際関係学部企画 講演会「ニューデタントの虚像と実像」</li> </ul>
11月3日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野外ステージ（以学館前）</li> <li>・昼間の模擬店</li> <li>・J-WALK コンサート</li> <li>・演劇祭典</li> <li>・ミュージックフェスティバル</li> <li>・スポーツ祭典</li> <li>・映像フェスティバル</li> <li>・学芸本部企画 鴻上尚史講演会</li> <li>・法学部企画 映画「善人の条件」</li> </ul>
11月4日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野外ステージ（以学館前、中央グラウンド）</li> <li>・昼間の模擬店</li> <li>・演劇祭典</li> <li>・ミュージックフェスティバル</li> <li>・クラシックフェスティバル</li> <li>・ダンスパーティー</li> <li>・8時間耐久ソフトボール大会（中央グラウンド）</li> <li>・映像フェスティバル</li> <li>・文学部企画 パネルディスカッション「どうみる？ 幼女連続殺害事件」</li> <li>・学術本部企画 講演「現代思想の潮流と科学的学問観」</li> </ul>
11月5日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野外ステージ（以学館前、中央グラウンド）</li> <li>・昼間の模擬店</li> <li>・演劇祭典</li> <li>・劇団そとばこまち特別公演</li> <li>・映像フェスティバル「スペシャル企画」</li> <li>・JAZZ祭'89</li> <li>・クイズ立命オープン（中央グラウンド）</li> <li>・経済学部企画 映画「タッカー」</li> <li>・産業社会学部企画 パネルディスカッション「誰のための中国か」</li> </ul>
11月8日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理工学部企画 講演「環境問題の新しい展開」</li> </ul>
11月9日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋のRBC祭（ゲスト西田ひかる）</li> </ul>
11月10日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経済学部企画 講演「環境問題と現代企業」</li> </ul>
11月11日	<ul style="list-style-type: none"> <li>大夜祭（模擬店、ステージ）</li> </ul>

（出所）『89年学園祭パンフレット』より作成

図表一九 1990年学園祭企画スケジュール一覧

11月2日 開会式	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハッスルボイスのど自慢大会（以学館前ステージ）</li> <li>・びっくり立命新記録（以学館前ステージ）</li> <li>・仮装行列</li> <li>・昼間の模擬店</li> <li>・劇団パノラマ☆アワー特別公演</li> <li>・学術本部企画 講演会「私たちの“再発見”」</li> </ul>
11月3日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ祭典（テニス）</li> <li>・クイズ立命オープン（中央グラウンドステージ）</li> <li>・レスルフィーバー立命館（以学館前ステージ）</li> <li>・ファッションショー VOGUE '90（体育館前ステージ）</li> <li>・昼間の模擬店</li> <li>・上方落語会、立命寄席</li> <li>・ダンスパーティー</li> <li>・学友会企画 パネルディスカッション「日本の安全保障について考える」</li> <li>・経済学部企画 映画「レインマン」</li> <li>・文学部企画 「手塚治虫 シネマ特集」</li> <li>・RBC祭（ゲスト生稲見子）</li> </ul>
11月4日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ祭典（バレーボール、サッカー、マラソン）</li> <li>・Beat Reaction '90（以学館前ステージ）</li> <li>・ミュージックフェスティバル</li> <li>・昼間の模擬店</li> <li>・JAZZ '90</li> <li>・アクロバットバイスクール 90</li> <li>・法学部・国際関係学部共催企画 パネルディスカッション「イラク・クウェート・平和憲法～世界の平和と日本民主主義を考える～」</li> </ul>
11月5日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファイター発グランプリ（以学館前ステージ）</li> <li>・泉谷しげるコンサート</li> <li>・クラシックフェスティバル</li> <li>・産業社会学部企画 パネルディスカッション「今“ジャパニーズを考える”」</li> </ul>
11月6日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経営学部企画 パネルディスカッション「過労死についてのシンポジウム」</li> </ul>
11月9日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理工学部企画 シンポジウム「びわこキャンパスにおける大学院の展開」</li> </ul>
11月10日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学芸本部企画 エスニック・カーニバル</li> <li>・大夜祭（模擬店、ステージ）</li> </ul>

（出所）『90学園祭パンフレット』より作成

図表二〇 1992年学園祭企画スケジュール一覧

10月26日～29日	ミュージックフェスティバル
10月31日 開会式	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮装行列</li> <li>・劇団善人会議特別公演</li> <li>・びっくり立命新記録</li> <li>・レSSLフィーバー立命館</li> <li>・スポーツ祭典(サッカー)</li> <li>・青空市場(模擬店)</li> <li>・北野大講演会</li> <li>・文学部企画 討論会「もっとももっとも京都を知りたい」</li> <li>・学術本部企画 講演会</li> </ul>
11月1日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・永井真理子コンサート</li> <li>・クイズ大会</li> <li>・今日だけバンド</li> <li>・ばんばひろふみ・上野俊樹講演会</li> <li>・ドッジボール大会</li> <li>・京の舞妓さん公演どすえ</li> <li>・バザー企画</li> <li>・青空市場(模擬店)</li> <li>・学芸本部企画 展示会「秋作展」</li> <li>・RBC企画 ENDLESS WAVE</li> </ul>
11月2日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上方落語会、立命寄席</li> <li>・京の舞妓さん公演どすえ</li> <li>・ダンスパーティー</li> <li>・バスケットボール大会</li> <li>・ソフトボール大会</li> <li>・CHEER UP!</li> <li>・クイズ大会</li> <li>・青空市場(模擬店)</li> <li>・法学部企画 長谷川正安講演会</li> <li>・クラシックフェスティバル</li> <li>・体力測定</li> </ul>
11月3日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・糸川英夫講演会</li> <li>・ダンス「華の嵐」</li> <li>・ライブスポット“ZONGHI”</li> <li>・ファイター発グランプリ</li> <li>・クイズ大会「立命オープン」</li> <li>・バレーボール大会</li> <li>・マラソン大会</li> <li>・バザー企画「ガレージセール」</li> <li>・青空市場(模擬店)</li> <li>・経営学部企画 クイズ大会経営学部30周年記念</li> <li>・理工学部企画 大槻義彦講演会</li> <li>・学芸本部企画 演奏会「音楽園」</li> <li>・産業社会学部企画 講演会「現代社会とわれわれ」</li> <li>・学術本部企画 加藤周一講演会</li> </ul>
11月7日	<p>大夜祭          &lt;模擬店、ステージ、プラネタリウム、路上音楽祭、ファイヤー          荒夜のカラオケ野郎大会、女装コンテスト&gt;</p>
11月14日	京都→草津 夜間ハイク～OVER NIGHT DREAM～

(出所)『92年学園祭パンフレット』より作成

図表二一 1993年学園祭企画スケジュール一覧

10月25～29日	ミュージックフェスティバル
10月30日 前夜祭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オープニングパレード</li> <li>・開会式「カウントダウン、情宣ダービー」</li> <li>・模擬店</li> </ul>
10月31日 アカデミックデー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シネマパラダイス</li> <li>・就職企画「それでも私は就職したい」</li> <li>・上方落語会、立命寄席</li> <li>・学園祭模擬店</li> <li>・僕らで作るご当地ソング</li> <li>・レススルフィーバー '93 立命ダブルインパクト～古都炎上～</li> <li>・クイズ立命オープン</li> <li>・国際交流会</li> <li>・RBC企画</li> <li>・学芸本部企画 展示会「秋作展」</li> <li>・学術本部企画 ちょっとだけ生討論</li> </ul>
11月1日 アクティビティデー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・骨髄バンク講演会</li> <li>・中央グラウンド企画 アウトドアin立命館</li> <li>・PK合戦</li> <li>・バレーボール大会</li> <li>・学術本部・法学部・ゼミ大事務局企画 山口定講演会</li> </ul>
11月2日 パフォーマンスデー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エイズ特殊講義</li> <li>・映画「LONG TIME COMPANION」</li> <li>・世界のエイズポスターと秋山孝のエイズポスター展</li> <li>・Club Z' (ミュージックフェスティバル)</li> <li>・渡辺美里コンサート</li> <li>・女装コンテスト</li> <li>・ワールドミュージカルカーニバル</li> </ul>
11月3日 びわこ・くさつキャンパスデー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学術シンポジウム</li> <li>・草津アベニュー</li> <li>・学芸本部企画 音楽園</li> <li>・大文字マラソン</li> <li>〈後夜祭〉</li> <li>・模擬店、プラネタリウム、熱く燃える後夜祭ステージ、ジャズ演奏会、夜空の華・レーザーショー、Sweet Dancing</li> </ul>

(出所)『93年学園祭パンフレット』より作成

図表二二 1994年学園祭企画スケジュール一覧

11月15日	RBC企画 笑いの宴
11月16日、17日	ミュージックフェスティバル
11月19日 BKC 立命新時代への模索	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開会式</li> <li>・展示会「琵琶湖疏水」</li> <li>・RITSUMEI CUP</li> <li>・一学生による料理講座－文舞料道</li> <li>・講演 「新時代の街づくり」</li> <li>・学生による学生のためのオープンキャンパス</li> <li>・パネルディスカッション 「教育」のウラとオモテ」</li> <li>・草津 Welcome to Kusatsu!</li> <li>・模擬店</li> <li>・体育会パネル展 チケット・グッズ販売</li> <li>・VISUAL FESTA '94</li> <li>・学芸本部企画「秋作展」</li> <li>・FINAL ON STAGE BKC から衣笠へ</li> </ul>
11月20日 学生文化の模索	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お昼の模擬店</li> <li>・パネルディスカッション「就職」</li> <li>・歴史講演会</li> <li>・シネマハウス立命「ミュージック ボックス」</li> <li>・はばたけ立命人</li> <li>・女装コンテスト</li> <li>・経営学部企画 オークション</li> <li>・RBC企画 Vivid Jam</li> <li>・国際関係学部・政策科学部共催企画 合同ディベート大会</li> </ul>
11月21日 のぞむべき社会への模索	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お昼の模擬店</li> <li>・講演 「現在だから考える！！」</li> <li>・講演 「あの城南電気の「宮路社長」に学ぶ！」</li> <li>・上方落語会</li> <li>・いつも一と違う以学館！'94 以学館の怪</li> </ul>
11月23日 21世紀への模索	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お昼の模擬店</li> <li>・大文字マラソン</li> <li>・学芸本部企画「学芸 1日体験入部」</li> </ul> <p>〈後夜祭〉 模擬店、ステージ、レーザーショー</p>

(出所)『94年度立命館大学学園祭パンフレット』より作成